

# 環日本海交流史研究集会の記録

## 「日本海域の土器製塩」

### はじめに

所長 湯尻修平

当センターの研究事業の一環として平成12年度から開始した「環日本海文化交流史研究事業」は今年度で10年目を迎えることができました。事業の目的は日本海に面した本県の歴史的特徴を理解するために共通の課題を掲げて調査研究を行うと同時に、沿岸各地との交流をはかることにあります。

事業は平成12年度に環日本海交流史の現状と課題をテーマに研究集会を行い、以降毎年集会を行ってきました。平成13年度の「鉄器の導入と社会の変化」や17年度「中世日本海域の土器・陶磁器流通」、18年度「縄文時代の装身具」など適時な研究成果をあげて来ています。これまでの基礎的な研究成果については、本誌の各号にその概要について紹介をしてきているところでもあります。

毎年の研究事業のテーマ設定については、平成18年度から当センターが行う各種講座や体験学習などに関連づけることとしており、平成21年度は「古代の知恵・わざ・こころ」に関係して「日本海域の土器製塩」をテーマといたしました。

今回の集会では主に土器製塩が各地に拡がり地域的特色をみせるようになる古墳時代から終焉をむかえる古代にかけての製塩工程について、主に土器と遺構の検討からその系譜と伝播をさぐることにしました。はじめに総論として能登半島の土器製塩研究の現状と課題について石川県歴史博物館の戸潤幹夫さんに紹介をしていただき、次に南から北へ発表をお願いしました。九州は福岡県糸島市教育委員会の平尾和久さん、山陰は島根県教育委員会増田浩太さん、福井県は福井県教育庁埋蔵文化財センター杉山拓己さん、石川県は当センターの空 良寛さん、富山県は氷見市立博物館の大野 究さん、新潟県は(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団の尾崎高宏さん、東北は秋田県埋蔵文化財センターの柴田陽一郎さんに各地域の実態や調査研究状況についてご報告をいただきました。

これまでの研究から能登地方では製塩土器の形態が脚台→丸底→平底へ変化したと考えられており、平底への変化が八世紀に若狭地方で成立した石敷炉による大型平底容器使用の専業生産を契機として行われるようになったことは既に指摘されていたことでありましたが、能登地方及びそれから東への広域的な平底製塩土器の伝播と変化は、今回の研究集会の報告であらためて鮮明にとらえられたと考えております。そして、製塩炉の構造や土器製塩の方法についても本県の七尾市大泊A遺跡の調査成果など新たに議論できる場を提供できたのではないかと考えております。

当センターでは今後ともテーマを変え、「交流史研究集会」の継続開催を進めていく予定ですが、本事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することを願っております。

# 能登半島における土器製塩研究の課題

戸潤 幹夫（石川県立歴史博物館）

能登半島における土器製塩研究は、1980年代から奈良・平安時代における製塩土器の編年的検討と技術的解明に大きな進捗をみたが、まだ多くの解決すべき基本的な課題が残されている。

まず、土器製塩の開始時期が不明確なことである。能登式製塩土器の最古型式は、大形で高い脚台を有する七尾市祖浜遺跡出土の一群を標式とするが、いまだ発掘調査によった良好な伴出資料に恵まれていない。現在は、月影式併行期の遺跡に出土する例が多いことや、その型式が大阪湾周辺の弥生時代後期に比定される脚台付製塩土器（広瀬Ⅰ式、積山Ⅰ-Ⅰ式AⅠ類）に類似することから、同期に大阪湾周辺の影響下で成立したとみる説が大勢である。しかし、祖浜型式には大阪湾Ⅰ式に特徴的な器面のタタキ調整が認められず、ナデ調整が普遍的な古墳時代の所産とみる説もある。

こうしたなか、近年、知多湾東岸において、森泰通によって大阪湾岸の脚台Ⅰ式に類するとして「清水式」の存在が知られ、また、その「清水式」にはタタキ調整をもたない在地化した一群（Ⅱ類）のあることも判明したことから、祖浜型式の系譜については大阪湾周辺にとどまらず東海地域も視野に入れた議論が不可欠となっている。

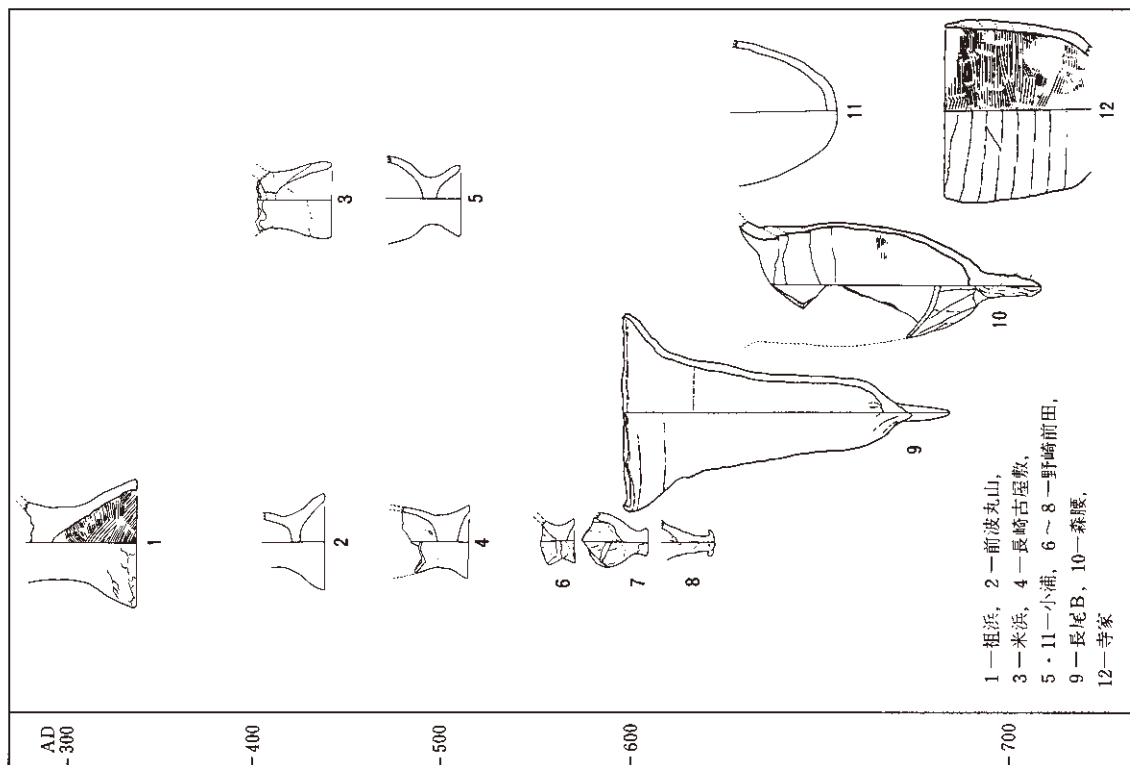
五世紀後半から六世紀の小形脚台付製塩土器の段階では、製塩遺跡の分布が平野の乏しい猫額の地にまで広く拡大し、塩と漁撈を主とした専門的な海人集団の存在が推測される。そうした社会的編成がどのような構造をもって推進されたのか、燃料資源などが競合する他の手工業生産や古墳文化の動態、あるいはその供給を受けていた内陸集団との関係など、総合的な検討がまたれるところである。

その後、脚台付製塩土器は一層の小形化が進み、やがて棒状脚付製塩土器へと独自の変化を遂げたとみられる。しかし、小形脚台式から棒状脚式への変化は、必ずしも半島一円にわたる傾向であったと明言できないようである。外浦沿岸では、古くから丸底形製塩土器の存在が知られ、若狭の影響によって脚台→丸底→平底へと推移したとする仮説があり、内浦沿岸と外浦沿岸との間で地域差の有無が問われている。

律令国家期では、棒状脚付製塩土器による伝統的な土器製塩が命脈を保ちながら、若狭で盛行した大形平底製塩土器による技術が波及・定着した。その背景については、東北経営に関わる軍事塩であったと評価する説が多い。その当否は分らないが、大形平底製塩土器による技術伝播は、若狭の官給塩の生産に倣った律令国家の思惑が少なからず反映しているとみられる。

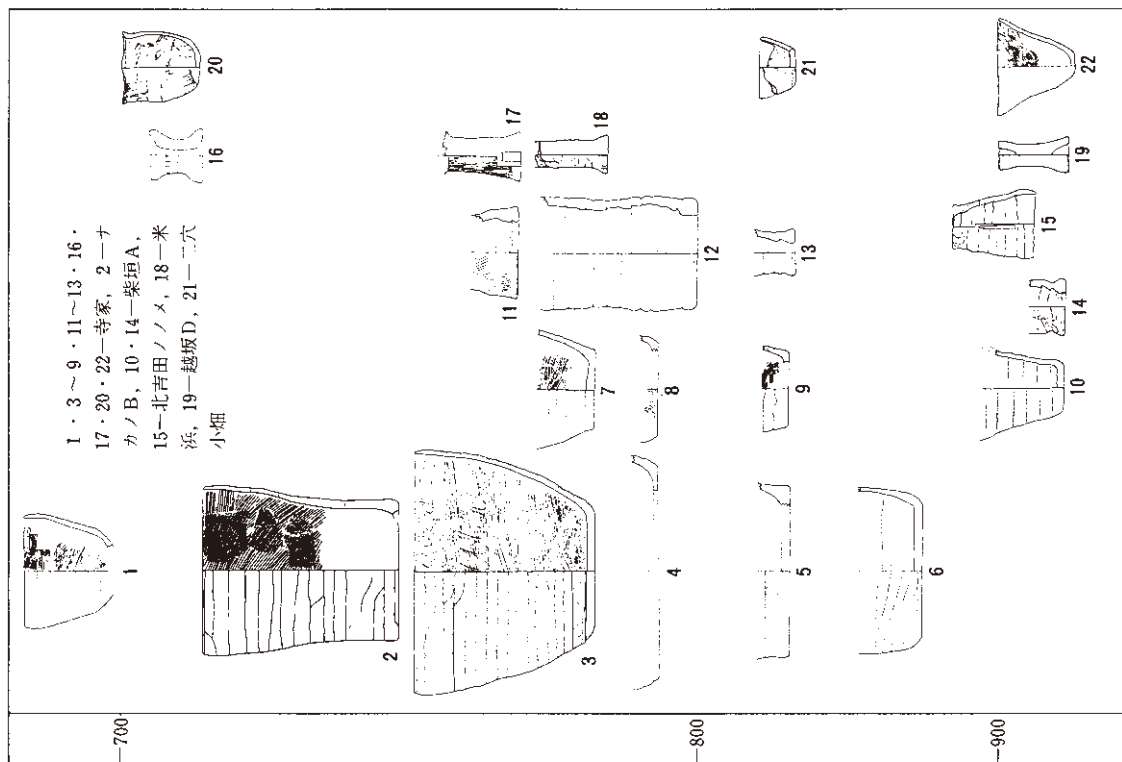
その一方では、若狭的土器製塩が扶植されて間もない8世紀前半の羽咋郡に、塩田（塗浜構造）・鉄釜による製塩が行われていたとする報告がある。塩浜・塩山を占取し、塩釜を所有する先進の塩生産となれば、国衙主導の可能性が高い。となれば、国衙主導のもとで二つの技術体系の異なる塩作りが、互いに圧迫しながら同時に稼働しているという矛盾が浮かび上がってくる。このような矛盾に対しどのような社会を読み取ればよいのか、技術論を含めた再検討が望まれる。

ところで、近年、棒状脚付製塩土器を用いた小規模な製塩工房跡の実例が増えている。それらは十世紀頃まで存続し、多彩な支脚や器台形土製品のほかに、焼けた珪藻土ブロックを伴う例が多い。珪藻土は耐火性に優れていることから炉壁に使われたと考えられが、その構造は明らでない。それは、塩田法による散状塩が主流となるなかで、棒状脚付製塩土器が民需に応えた焼成固形塩用として命脈を保った技術的背景とも絡む問題であり、その考古学的証左となる遺構の検出が期待されている。



能登式製塩土器編年試案 1〔1／6〕

橋本澄夫 戸淵幹夫 1994「日本土器製塩研究—石川県—」〔日本土器製塩研究〕



本表は小嶋芳孝「北陸地方の古代製塩土器編年試案」(1988)をもとに抽出・加筆したもの。

能登式製塩土器編年試案 2〔1／12〕

弥生V後半		1	<p>A1類 1 2</p> <p>B類 4</p>	地床炉
庄内	大阪湾I式	2	<p>A2類 5 6 7 8</p> <p>C類 9</p> <p>D類 10</p> <p>E類 11</p>	
布留(古)		3	<p>0 20cm</p> <p>F1a類 12 13 14 15 16 17 18</p>	
初期須恵	大阪湾II式	1	<p>F1b類 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31</p> <p>F2a類 19</p> <p>F2b類 28</p> <p>H1類 27</p> <p>H2類 29</p> <p>H3類 23</p> <p>G類 20</p>	石敷炉
TK 208 TK 47		2		
MT 15 TK 43		3		
TK 43? ?	大阪湾III式	1	<p>I1類 30</p> <p>I2類 31</p>	

大阪湾沿岸の製塩土器編年

積山 洋 2007「大阪湾沿岸の漁撈・製塩集団と広域交流」『第56回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の海人集団を再検討する発表要旨集』



# 北部九州の土器製塩について

平尾 和久（福岡県糸島市教育委員会）

## 1. はじめに

北部九州における土器製塩研究は「停滞」ともいえる時代がしばらく続いたが（山崎1994）、近年、沿岸部地域の開発に伴う発掘調査で製塩土器の出土事例が増加し、弥生時代から古代まで土器製塩の概観が可能になった。そこで、本稿では新資料をもとに北部九州製塩土器の特徴をみていく。

## 2. 北部九州土器製塩のふたつの画期

北部九州における製塩土器の時期的変遷を追っていくと、大きく2つの画期が存在する。それは古墳時代前期の脚台付製塩土器の導入と、8世紀の玄界灘式製塩土器の成立である。

第1の画期は脚台付製塩土器の導入に伴う土器製塩の成立である。北部九州における弥生時代の土器製塩は基本的に日常土器を転用して行われる。製塩に用いられるのは甕で、器表面が剥離したり、白っぽいものが付着する特徴をもつ。これらはいずれも弥生時代中期のものである。これまで確認されている遺跡では備讃瀬戸内でみられる土器の集中は認められず、基本的に小規模な製塩であったと考えられる。なお、弥生時代後期になると出土事例がほとんどなくなり、不鮮明な状況となる。

そのような中、古墳時代にはいと、再び土器製塩が確認される。しかも、古墳時代前期の製塩土器は備讃瀬戸内に系譜をもつ製塩専用の土器であり、ここに北部九州の土器製塩の本格的な成立が認められる。また、福岡市今宿遺跡や今山遺跡では多量の製塩土器が出土しており、自家消費的なものとは異なる大規模な製塩といえ、画期が設定できる。

第2の画期は玄界灘式製塩土器の成立と機能分化である。古墳時代までは煎熬と焼塩をおなじ製塩土器で行っていた。しかし、8世紀になると用途に応じた製塩土器が出現する。煎熬用の玄界灘式製塩土器と焼塩壺である。玄界灘式製塩土器は古墳時代の長脚化する製塩土器と形態が全く異なり、分布域も大きく変化することから、土器製塩に関する大きな発想の転換が認められるが（山崎1994）、大阪府阪南市田山遺跡でも煎熬用と焼塩用の土器が分化しており、大阪湾岸地域と北部九州で共通した現象がみられる（岸本1998）。なお、奈良時代の玄界灘式製塩土器はすでに形態が完成したものとなっており、その祖形は古墳時代までさかのぼる可能性も指摘されている（山崎1994）。

## 3. おわりに


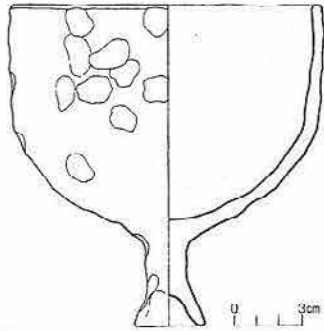
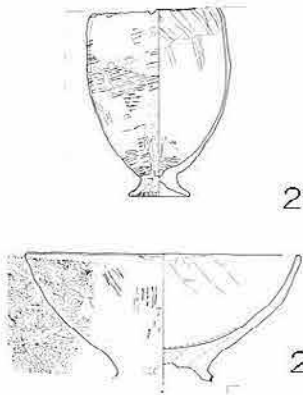
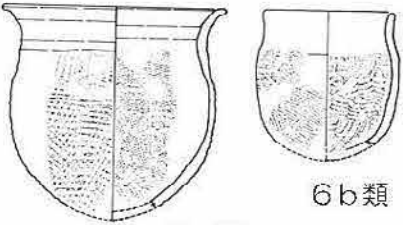
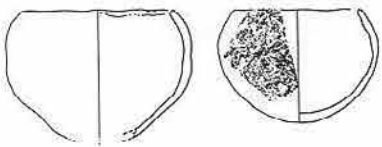
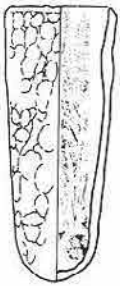
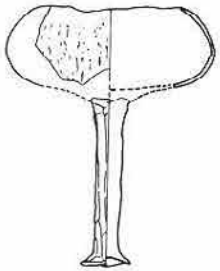

北部九州における土器製塩研究は近年の調査の進展により、研究環境が整いつつあると個人的には考えている。これまで資料的な制約からアプローチできなかった課題も多く存在しており、今後の研究の活性化に期待される。

最後に発表の機会ならびに本稿執筆の機会を与えていただいた（財）石川県埋蔵文化財センターの皆様にお礼申し上げます。

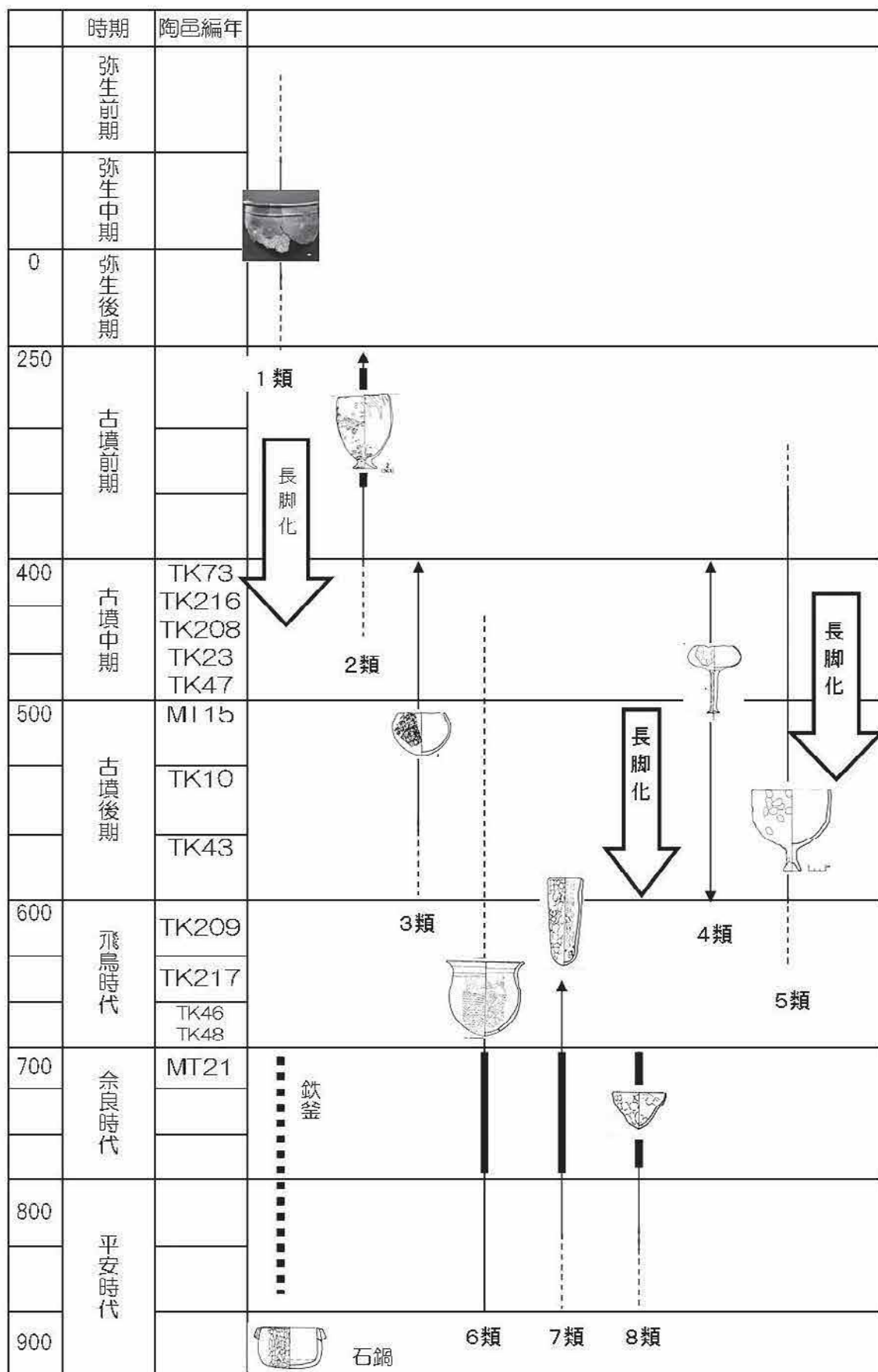
【参考文献】多くの文献があるが、紙幅の関係で大部分を省略している。

岸本雅敏 1998「古代国家と塩の流通」『古代史の論点』3 都市と工業と流通 小学館

山崎純男 1994「福岡県」『日本土器製塩研究』青木書店

1 類		5 類	
2 類	 <div>2 a 類</div> <div>2 b 類</div>	6 類	 <div>6 a 類</div> <div>6 b 類</div>
3 類		7 類	
4 類		8 類	 <div>8 a 類</div> <div>8 b 類</div>

第 1 図 製塩土器分類図



第2図 北部九州製塩土器編年表

# 山陰地域における土器製塩とその系譜

増田 浩太（島根県古代文化センター）

## 土器製塩の変遷

山陰地域における土器製塩の初現は、3世紀後半とされている。明確な製塩遺構は皆無であり、散見される製塩土器の存在をもってのみ、その様子を知ることができる。山陰西部では、島根県安来市の柳遺跡出土低脚付土器が、被熱による表面の剥離の様子から製塩土器と想定される。形態的に備讃瀬戸地域、あるいは玄界灘沿岸の北部九州地域との関係を指摘する研究者もあるが、後続する資料が今のところ皆無であり、定着した様子はうかがえない。一方山陰東部では、鳥取県湯梨浜町の長瀬高浜遺跡出土製塩土器が著名である。平底コップ形の特徴的な土器で、資料数は少ないものの5世紀代まで因幡・東伯耆地域で用いられている。この特異な形状の製塩土器は、全国的にも類似例が無く、その出自も定かでない。両者の分布域は大山北麓を境界として、東西に明瞭に分かれる。

5世紀以降、山陰地域の製塩土器は、脚台部の径をすぼめながら長脚化していく。製塩遺構の検出が皆無であるため、現時点では周防や北部九州の製塩土器編年を時間軸に援用せざるを得ない点に危うさがあるが、島根県松江市郷の坪遺跡や伊屋谷遺跡出土土器に見られるように、低脚から棒状脚への変化は明白である。山陰東部では、現時点で長脚化した製塩土器の出土はないが、平底コップ形から扁平な低脚を持つワイングラス形に移行する様子がうかがえる。山陰西部の変遷と同じ動きと捉えることも可能であろう。

7世紀中葉になると、鹿蔵山式と称する尖底碗形の製塩土器が出現するが、出土例は少ない。山陰地域は、若狭・能登のような塩貢進国でないこともあり、律令体制後も生産遺跡や生産量が著しく増大した様子はない。この時期では、北部九州地域を中心に採用された玄界灘式と呼ばれる土器も出土している。玄界灘式の甕は煎熬工程に特化した土器であり、山陰地域もまた「煎熬土器」と「焼塩壺」を併用する時代に入ったことがうかがわれる。現状では出土例、地域とも限られるが、一般に常用される甕を転用するなどの方法で、これに代えていた可能性が高い。焼塩壺としては砲弾形の六連式が広く用いられるが、内面の布目痕の有無など若干の差異が認められる。出雲平野部の出土例から、土器製塩は8世紀中葉前後まで行われていたことが確実だが、他地域と同様、徐々に鉄鍋等に転換していったと考えられる。

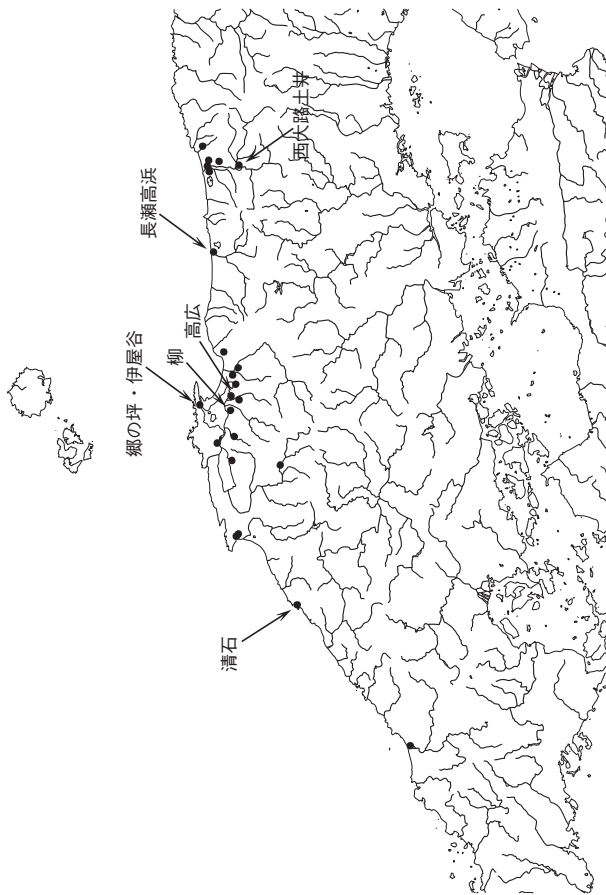
## 製塩土器の分布と塩の流通

製塩土器は、山陰地域全般の沿岸部に分布する。遺構の検出例はないが、古墳時代までの出土遺跡は大半が海岸線もしくは河口付近から1～2 km 圏内に分布し、小規模ながら生産を手がけていた遺跡が多く含まれると判断される。当時の首長墓の分布や、日常使用される煮炊具の使用領域などを考慮すれば、生産された塩の流通圏がそれ以上に広域であったとは考えがたい。7世紀中葉以降では、官衙、寺院等からの焼塩壺の出土が増え、内陸部の集落にも分布域が広がる。公的施設と集落では、塩自体の持つ意味合いが異なると考えられるが、律令体制下における、より広範に展開する流通機構の一端を垣間見ることができる。

## 他地域との技術的交流

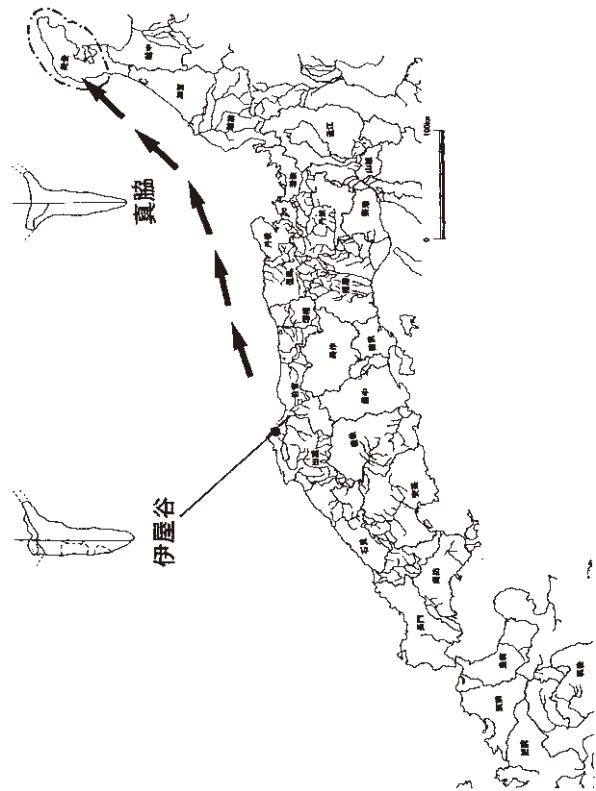
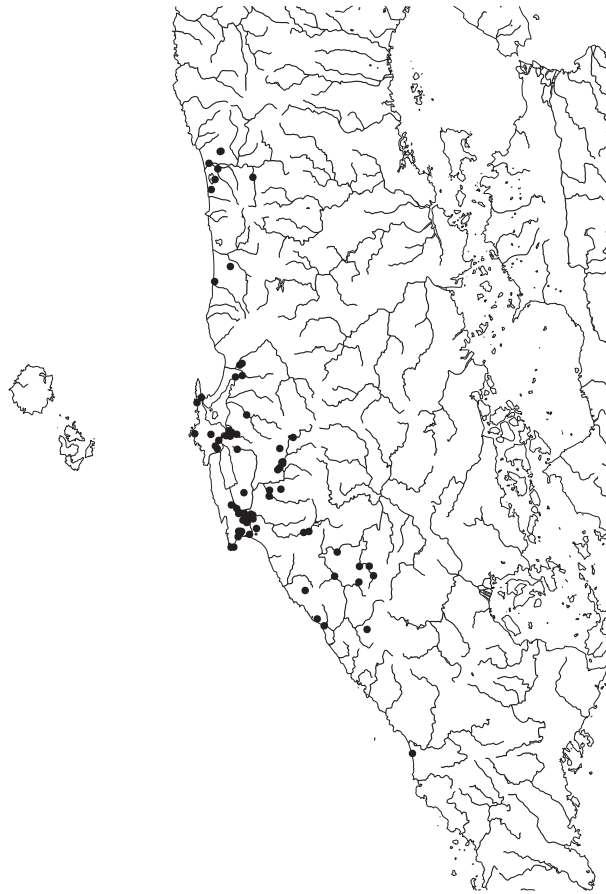
既に記したとおり、土器製塩は備讃瀬戸地域もしくは北部九州地域の影響をもって導入されたと考えられる。また5世紀から7世紀にかけての長脚化は、能登地域・知多地域のそれと類似する点が既に指摘されている。山陰地域の製塩土器編年自体、時間軸に関し曖昧な点が残るため、相互の前後関係や伝播経路を語ることは容易でない。しかし、但馬地域の宇川式製塩土器や前記の玄界灘式土器など、山陰地域の製塩土器が周辺地域の影響を断続的に受けながら変遷してきたことは間違いない。現時点で相互の直接的な影響を捉えることは難しい。とはいえ生産量、作業効率に直結する技術的創意工夫は、モノの流通よりも容易く地域の垣根を跳び越えていくのかもしれない。



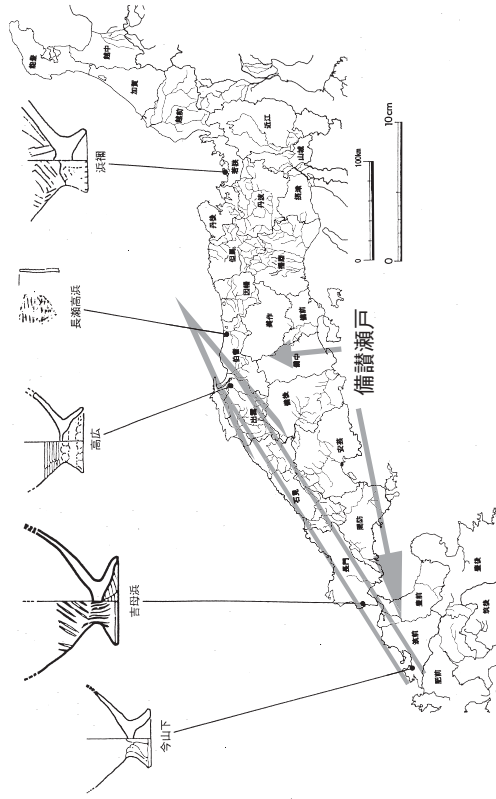


弥生、古墳時代における製塩土器の出土遺跡

律令期における製塩土器の出土遺跡

















山陰地域と能登との関係（7世紀）（飛田 2002）

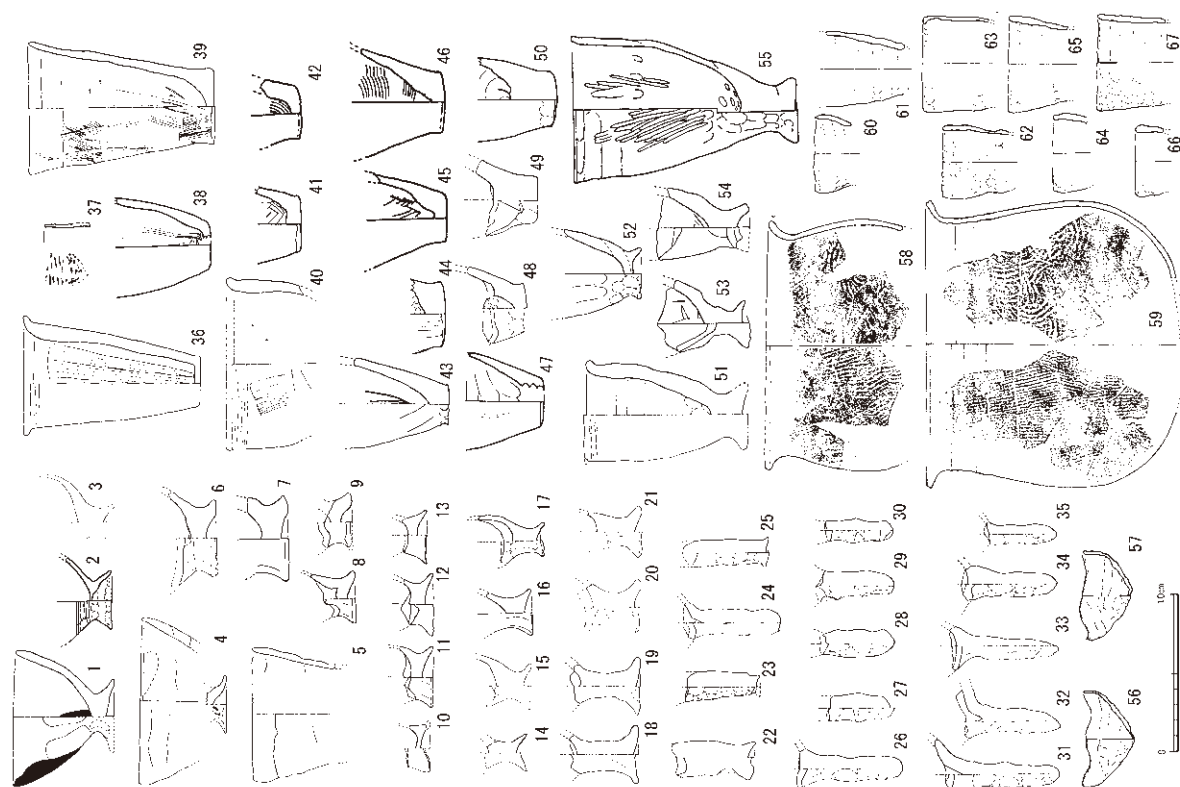


山陰地域への初期製塩土器の伝播経路（飛田 2002を改変）



	周防 (美濃ヶ浜式土器)	西山陰 (郷の坪式土器)	東山陰 (長瀬高浜式と宇川型)
250			長瀬高浜式
300			
350			
400			
450		郷の坪式	宇川型
500			
550			
600			
650		鹿蔵山式	
700			
800	玄界灘式	六連式	

山陰地域の製塩土器編年 (内田 1994・飛田 2002を改変)



1: 柳 2: 高広 3: 清石 4/5: 前田 6~9/11~17/20/21/25: 郷の坪 10/22~24・26~35: 伊屋谷  
18/19: 出雲大社境内 36/37: 長瀬高浜 38/41/44/47/48/50: 円蔵寺坂/下 39/43/55: 西大路土居  
40/42/45/46/61/62: 栗谷 49/51: 大谷第1 52: 秋里 53/54: 長砂第3 56/57/66/67: 鹿蔵山  
58: 郷上 59: 野田西 62: 忌部 63: 出雲国分尼寺 64/65: カネツキ免

山陰地域における製塩土器

## 若狭湾沿岸の土器製塩

杉山 拓己（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

若狭地方における土器製塩は1958年から同志社大学がおおい町大島半島を対象として行った調査の報告書『若狭大飯』でまとめられ、以降の研究はこれを発展・継承する形で行われてきた。近年では製塩遺跡の調査事例が減少しているが、京都府舞鶴市浦入遺跡において若狭と類似する土器製塩の詳細が把握された結果、従来の編年に対して問題点も指摘されている。

現状での課題として挙げられるのは、まず旧来の製塩土器編年の修正の必要性であるが、各型式間の系統の交代や時間的間隙の有無、土器製塩を取り巻く背景の変化の検討も十分とはいえない。

既往の研究をふまえ、若狭地方の製塩土器における器形の消長を時間軸上に整理すれば、図6のようになる。これらは以下のとおり6つの段階に区分できる。

**1段階：**コップ形脚台付容器からなる。石敷炉は確認できず、粘土床をもつ土坑状の炉跡1例のみが確認されている。従来の浜瀬Ⅰ式。4世紀後半から5世紀前半頃と考えられる。

**2段階：**コップ形丸底容器からなる。石敷炉も確認できる。従来の浜瀬ⅡA式。5世紀の後半から6世紀の前半にあたる。

**3段階：**鉢形の丸底容器のみが使用される段階。やや大きめの石を敷き詰めた炉跡が確認できる。従来の浜瀬ⅡB式。6世紀末を上限として7世紀を主体とする。古墳から出土する例もある。

**4段階：**大形平底容器が出現。従来は平底容器のみからなる船岡式として理解されてきたが、低い支脚と鉢形丸底容器が確実に存在する。7世紀末を上限とし、8世紀が主体となる。船岡遺跡では長方形の石敷炉が多数確認されている。

**5段階：**鉢形と壺形の丸底容器、支脚からなる。従来の吉見浜式。10世紀を中心とすると考えられる。この時期以降炉の石の敷き方が粗くなっていく。

**6段階：**支脚が長大化し、小形のコップ形容器が伴う。従来の塩浜式と浦入O-2地点式にあたる。12世紀後半を下限とする。支脚の伸長の度合いから細分できるが、資料が少ないので一括する。

1・2段階は土器の系統の交代がみられるものの大阪湾沿岸での変化と一致するため、連続した技術移入が想定できる。なお同時期には丹後の平遺跡でコップ形の脚台付容器が確認され（図5）、山陰や能登との関係で注目される。

この時期は大型古墳の築造開始とも近接するため畿内勢力との政治的関係が背景として想定されてきた。消費の様相は不明であるものの、製塩遺跡では刀剣装具を初めとする各種骨角器の生産も認められ、多様な生産活動の一環として製塩が行われていることも波及元のあり方と一致している。

3段階になると製塩遺跡から各種の遺物は出土せず、生産活動は製塩に単純化している可能性が高い。こうした集約的な状況への移行は、土器の容量や形態が類似している備讃瀬戸地域で想定されている変化と同様である。

4段階は従来から若狭の土器製塩の盛行期とされ、都城出土木簡からは若狭が調塩供給地として卓越していたことがわかっている。従来の理解とは異なり複数器種の共存期としたが、今後これらの使い分けと生産のあり方との関係についての実態を検討していく必要がある。なお越前地方において土器製塩が明確となるのもこの時期以降である。

若狭では平底容器は大型のもののみで終わり、支脚が長大化して以降は遺跡数も減少する（5・6段階）。これまでは調庸制の衰退や国衙支配の強化と関連付けられていたが、近年下限年代はさらに下方修正されている。中世への社会変化の中に土器製塩の変質を位置づけていく必要があるだろう。

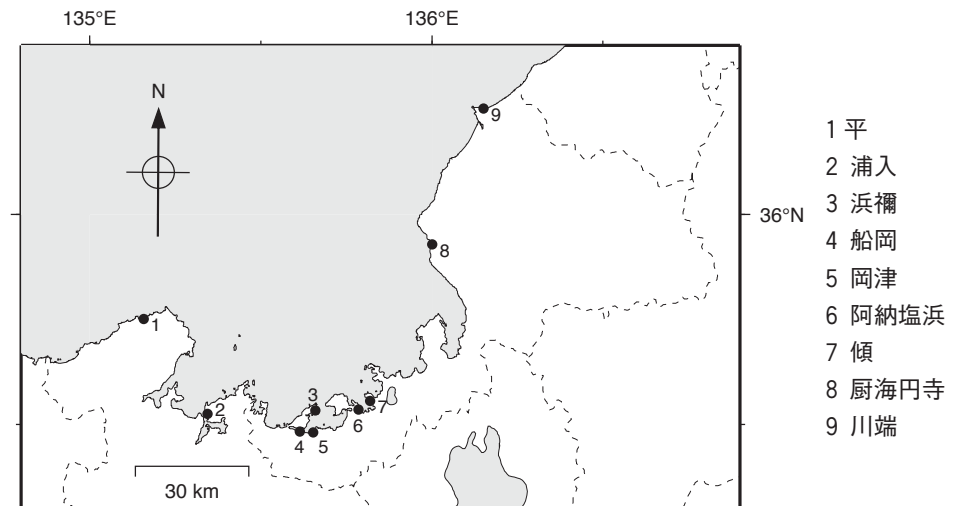


図1 主要遺跡位置図

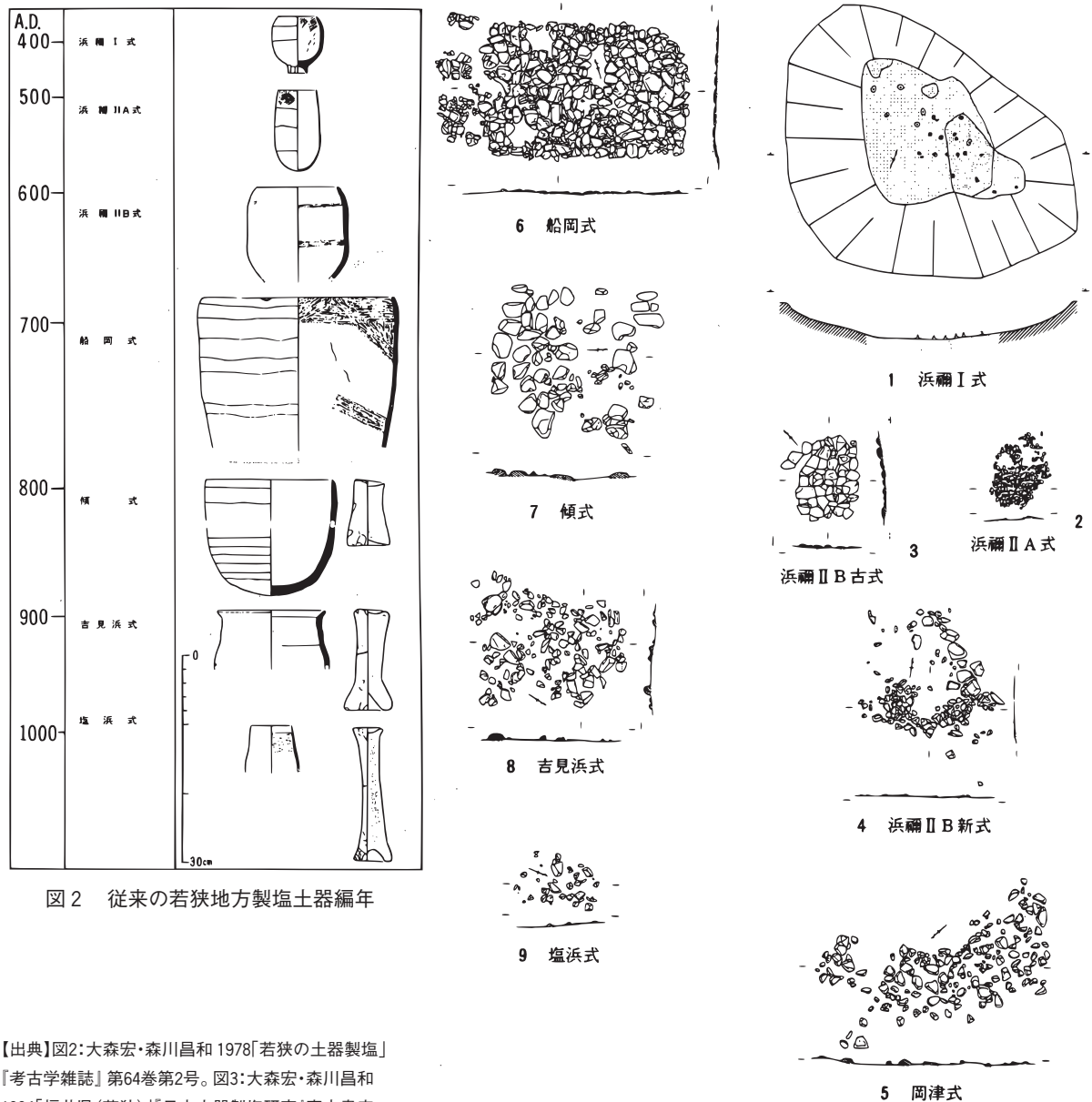


図2 従来の若狭地方製塩土器編年

図3 製塩炉跡の編年（縮尺：約1／100）

【出典】図2:大森宏・森川昌和 1978「若狭の土器製塩」『考古学雑誌』第64巻第2号。図3:大森宏・森川昌和 1994「福井県(若狭)」『日本土器製塩研究』青木書店。

期	土器型式	遠 敷 郡 (小丹生評)			三 方 郡 (三方評)	
		遺跡数	10	20	10	20
I 期	浜欄 1 式					
II 期	浜欄 2A 式					
III 期	浜欄 2B 式					
IV 期	輪 岡 式					
V 期	横 式					
VI 期	吉見浜式					
VII 期	塩 浜 式					
豊原宮 平城宮	塩付木簡 出土点数					

図 4 若狭地方土器製塩遺跡数の推移

【出典】図4:岸本雅敏 1992「律令制下の塩生産」『考古学研究』第39巻第2号。図5:河野一隆 1997「丹後半島最古の製塩土器」『京都府埋蔵文化財情報』第63号。図6:前掲大森・森川 1994, 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001『浦入遺跡群』、同志社大学文学部 1966「若狭大飯」をもとに筆者作図。

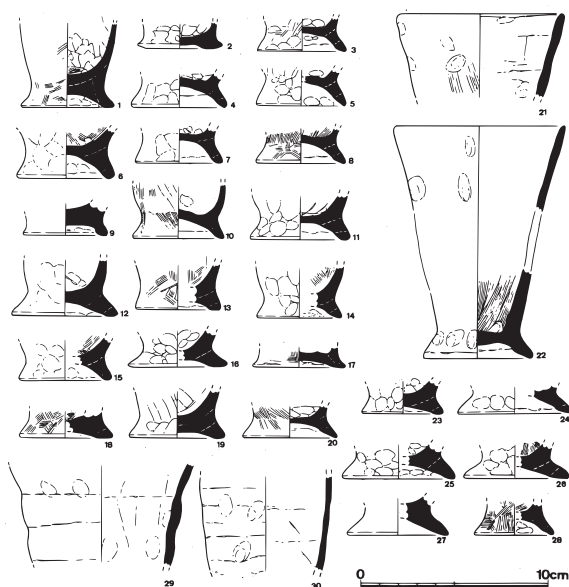


図 5 京丹後市平遺跡出土土宇川型製塩土器

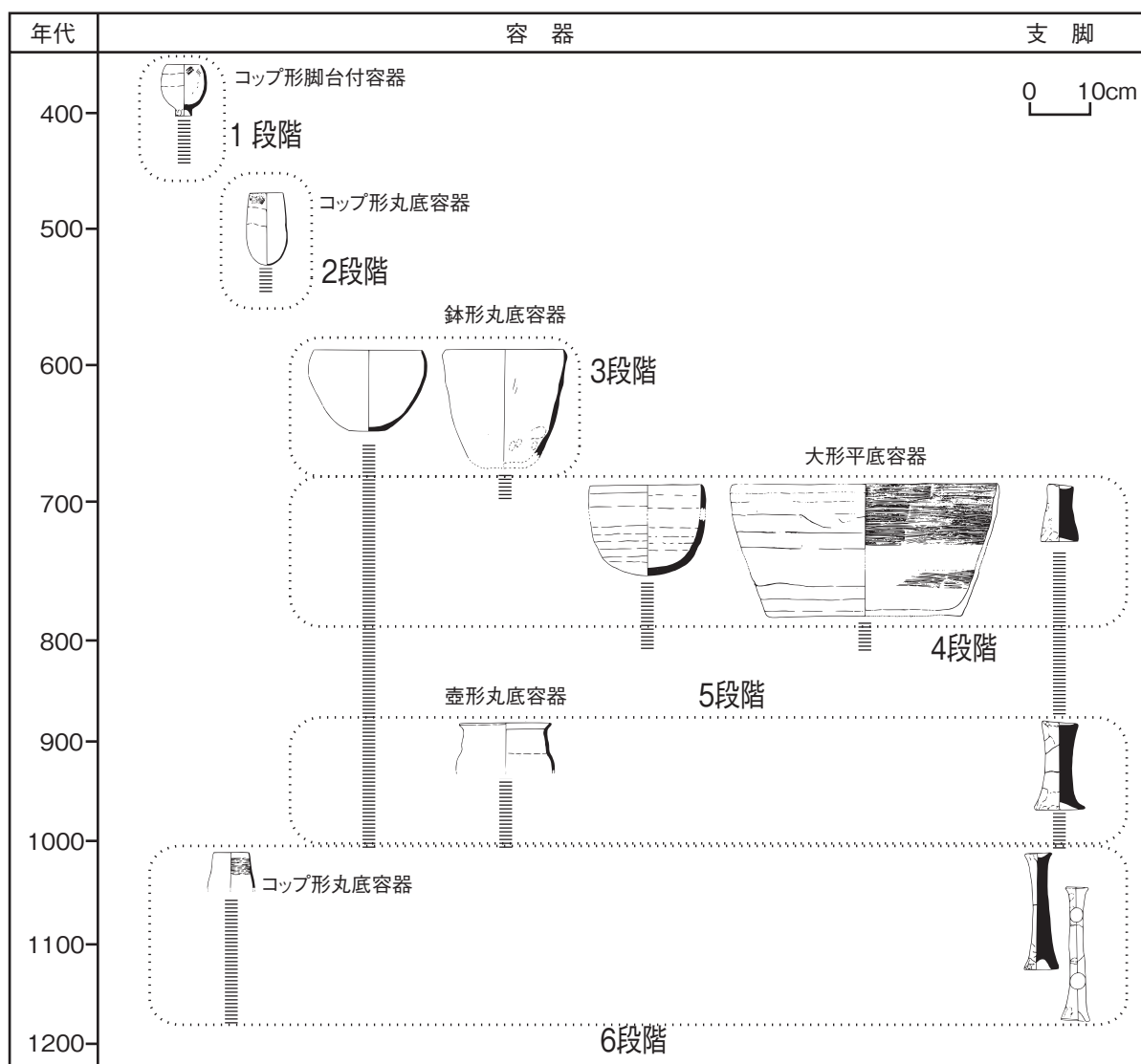


図 6 若狭地方製塩土器編年試案 (縮尺: 1/12)

# 能登地方の土器製塩遺跡

空 良寛（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

## 1. はじめに

能登地方では土器製塩を行っていた遺跡が内陸部を除くほぼ全域に分布している。遺跡の数は現在200以上といわれているが、発掘調査の実施された遺跡はそのなかの一部で、詳細の知られていない遺跡も多い。ここでは、近年の調査成果を中心に能登地方の土器製塩遺跡の現状を紹介したい。

## 2. 近年の調査成果と棒状尖底土器

90年代以降の調査では、内浦地域を中心に多くの遺跡から棒状尖底の製塩土器が出土しており、8世紀以降に外浦地域から広がりをもせる平底の製塩土器との関連が注目されている。また、製塩遺構が見つかる調査事例も増加しており、土器製塩の作業工程を考える上でも重要な視点を与えている。

棒状尖底の製塩土器に関しては、能登町真脇製塩遺跡や七尾市中島町のヤトン谷内遺跡から10世紀代の製品が出土しており、平底の製塩土器との併用が確認されている。また、真脇製塩遺跡では10世紀後半になると平底の製塩土器だけが残るようである。なお、分布状況の新知見として、能登半島の最先端部珠洲市大谷中学校東遺跡から8世紀頃の棒状尖底の製塩土器が見つかった。

製塩遺構に関しても近年の調査で様々な発見がなされている。大谷中学校東遺跡では「コ」の字状の区画溝に囲まれた中に炉跡が検出されている。その上層では粘性土を貼った層が見られ、簡易的な塩田が営まれていたと考えられる。真脇製塩遺跡では9世紀末から10世紀後半ころの自然石を配した製塩炉が見つかった。七尾市三室トリ A 遺跡では10世紀前半頃の棒状尖底の製塩土器と平底、丸底の製塩土器、支脚が併用されており、被熱した珪藻土塊が見つかった。また、七尾市の富山湾側の最南端に位置する大泊 A 遺跡からは様々な種類の製塩炉が見つかった。大きく分けると2種類で正方形のものと楕円形のものである。正方形の製塩炉は一辺1m～1.2m、深さは10～20cmで、遺構は細かく割れた製塩土器片と炭、灰を含む黒い土で埋まっている。楕円形のは長辺が2m前後で深さが30～40cmのすり鉢状になっている。被熱した珪藻土ブロックを配したもの、玉砂利を敷き詰めたものなどが見つかった。楕円形の炉では製塩土器がほとんど出土しておらず使用用途は不明である。

## 3. まとめ

以上の調査成果から内浦地域では10世紀頃まで棒状尖底の製塩土器と丸底、平底の製塩土器と支脚がセットになったものが並行して使用されていたと推測される。また製塩炉も珪藻土を配した炉跡とともに様々な形態の製塩炉が使われていた可能性があり、能登地方独自の土器製塩の変遷が解明されつつある。今後、製塩土器や製塩遺構などから生産体制などについて究明していくことが課題である。



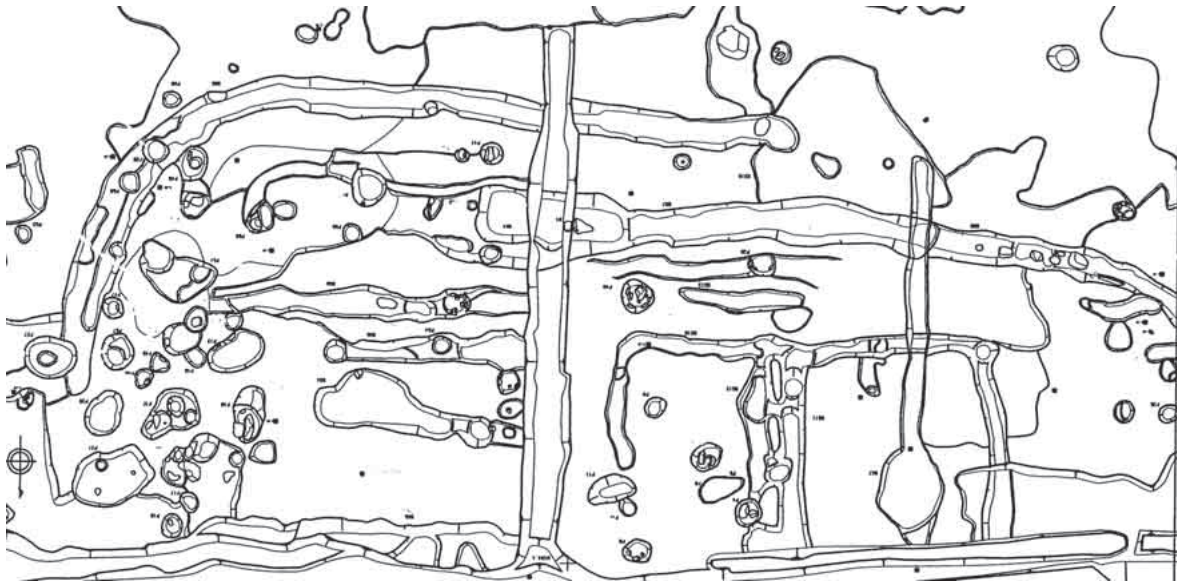


図1 大谷中学校東遺跡 溝に囲まれた製塩炉

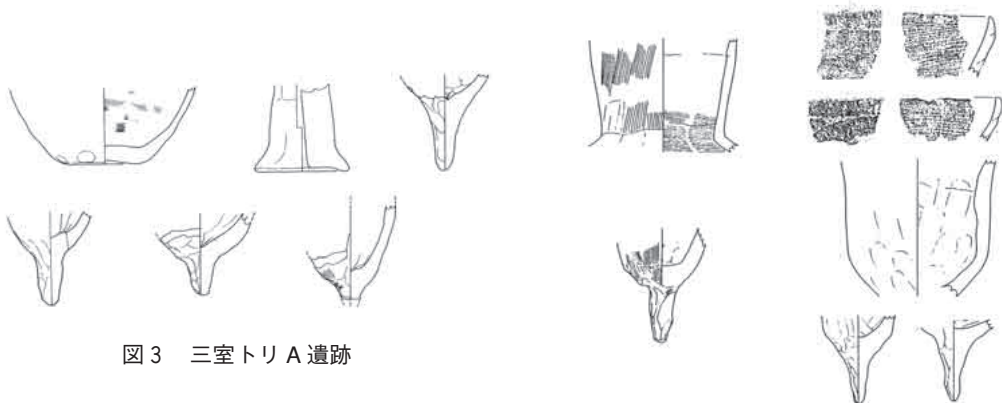


図2 大谷中学校東遺跡

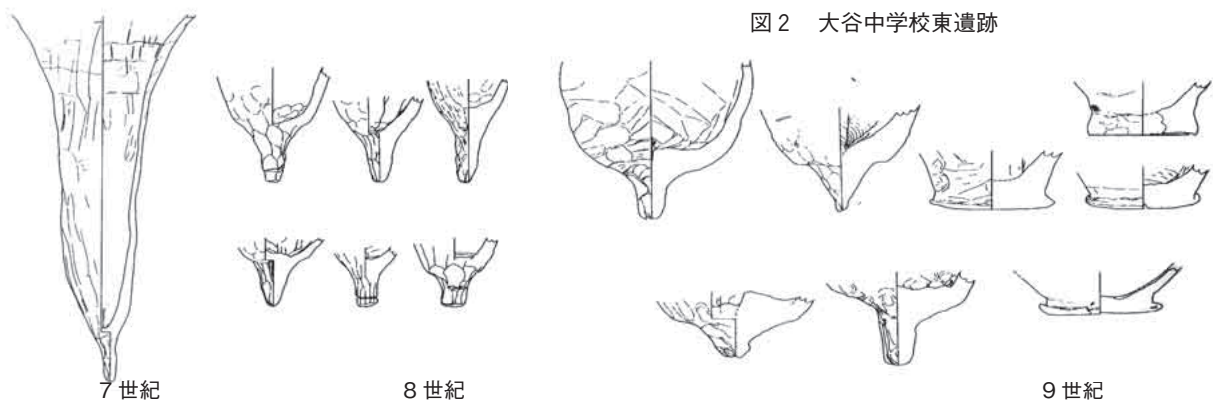


図3 三室トリ A 遺跡

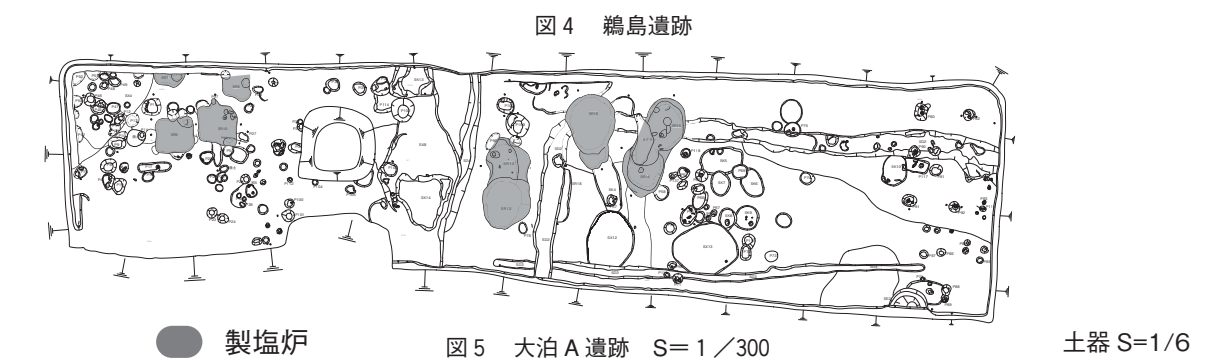


図4 鵜島遺跡

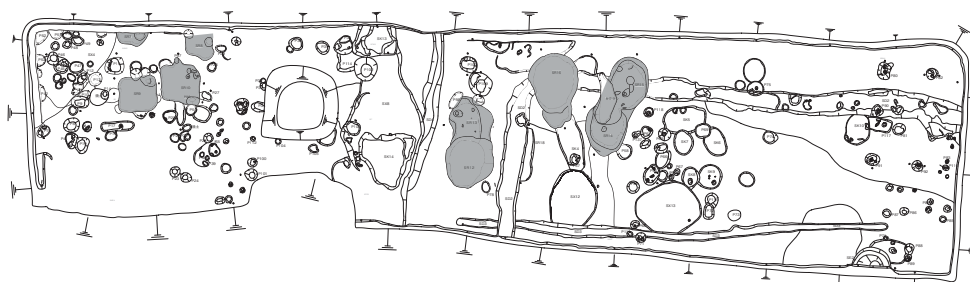


図5 大泊 A 遺跡 S=1/300

土器 S=1/6

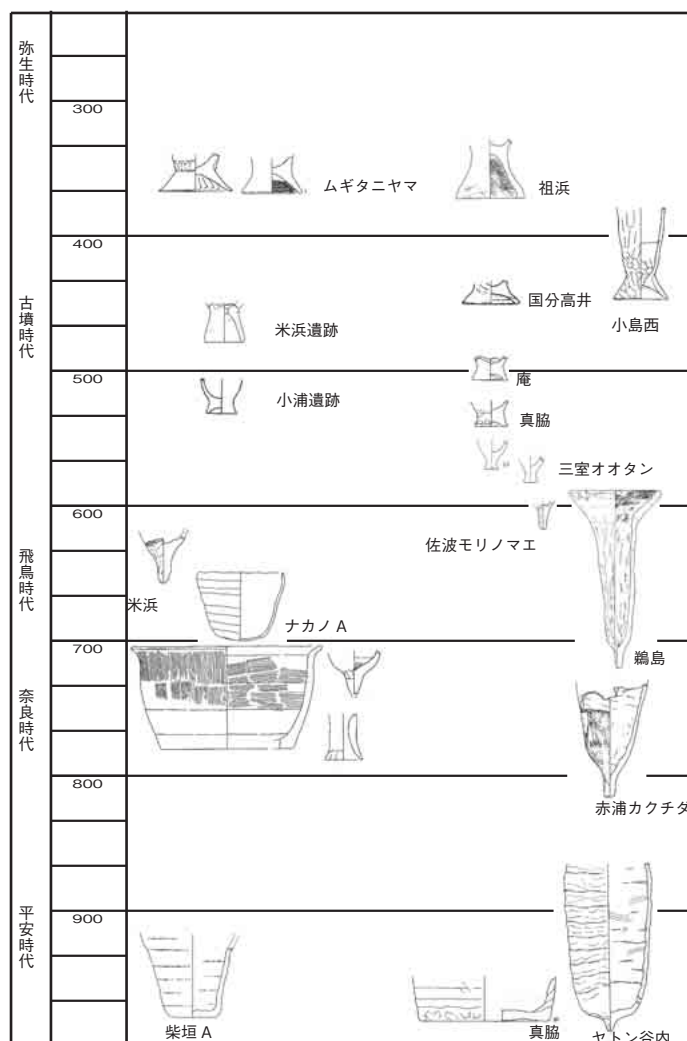


図9 製塩土器編年表 S=1/12

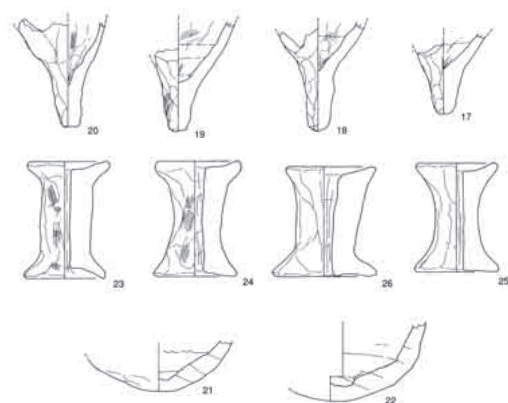


図6 三室トリ A 遺跡

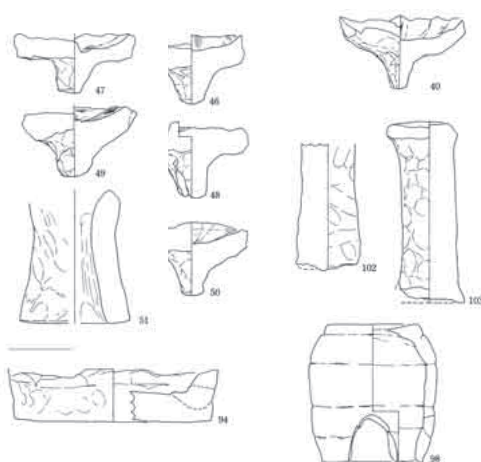


図7 真脇製塩遺跡



図10 能登半島の主な製塩遺跡

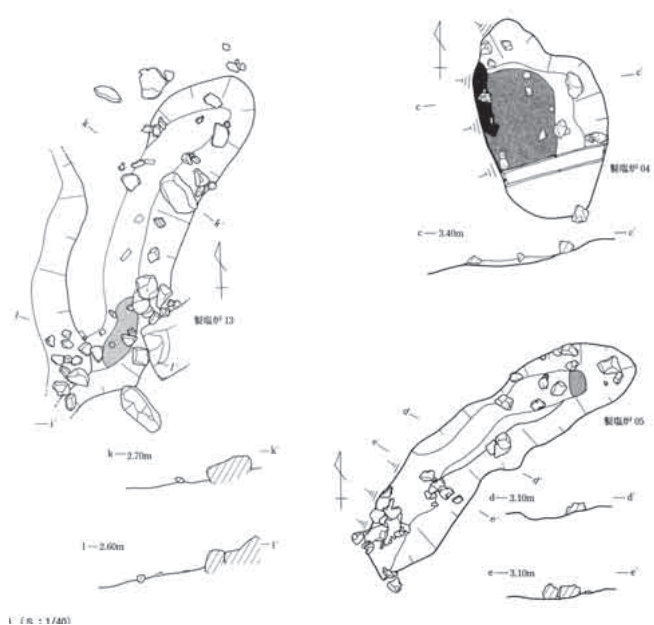


図8 真脇製塩遺跡配石炉 S=1/120

# 富山県の土器製塩

大野 究（氷見市立博物館）

昭和49年の九殿浜遺跡発掘調査以降本格化した富山県の土器製塩研究であるが、現段階で製塩土器が出土する遺跡は59ヶ所にのぼる。

分布状況をみると、海岸沿いでは氷見市と朝日町に集中する。両地域は海岸近くに丘陵がせまる地形であり、燃料の薪を得やすい立地である。内陸部では富山平野と砺波平野全域に分布し、小矢部川流域には海岸部から30km以上、標高100mをこえる例もある。

5世紀末から6世紀前半にかけて、脚台製塩土器が氷見海岸沿いに点在しており、これらが富山県における製塩土器初出の一群である。能登地域からの導入と考えられる。

6世紀末から7世紀末までは、棒状尖底製塩土器が多く分布する。海岸沿いでは氷見海岸にほぼ集中しており、生産地はこの辺りと推定される。製塩土器の分布は県内一円の内陸部にまで広がっており、生産・流通の管理を氷見地域の集団が担っていた可能性がある。

なお、九殿浜遺跡にわずかに丸底製塩土器があるが、能登地域と同様に一時期の中間的な役割を果たした特殊な形態と理解しておきたい。

8世紀も棒状尖底製塩土器が存続するが、この時期の類例は少ない。平底製塩土器は8世紀後半には導入されているが、やはり類例が少ない。

9世紀から10世紀にかけては、棒状尖底製塩土器と平底製塩土器が併存する。棒状尖底は、短脚大型のものが主体となる。また10世紀には平底に口縁部が外反するタイプが出現する。棒状尖底は10世紀後半には姿を消すようである。

11世紀以降は平底製塩土器が主体となり、中世初めの12世紀後半まで続く。

なお土器編年案には掲載しなかったが、10世紀以降県東部海岸沿いには円筒型土製品や支脚が加わっている。

県内の製塩土器出土例は徐々に増加しているが、ほとんどは少量の破片出土であり、製塩関連の遺構に伴う例も少ない。現段階で確実に製塩炉と考えられるのは境関跡の一例のみであり、これは20～40cmの扁平な自然礫を壁面に用いて構築した3.5×3.5mの隅丸方形のものである。この他では焼土遺構や土坑出土例が若干あるのみである。

このように資料が乏しく、富山県の土器製塩の実態は、まだまだ不明な点が多いが、製塩土器の様相からすれば、各時期を通して能登の影響下にあったといえよう。

10世紀以降、生産地は朝日町周辺の海岸部に移っていたと考えられるが、8・9世紀の生産地は不明である。特に8世紀は製塩土器そのものの出土例が少なく、北陸の周辺地域に存在するような大型の製塩土器についても確実な例を確認できない。この点の評価が、今後の課題となるであろう。

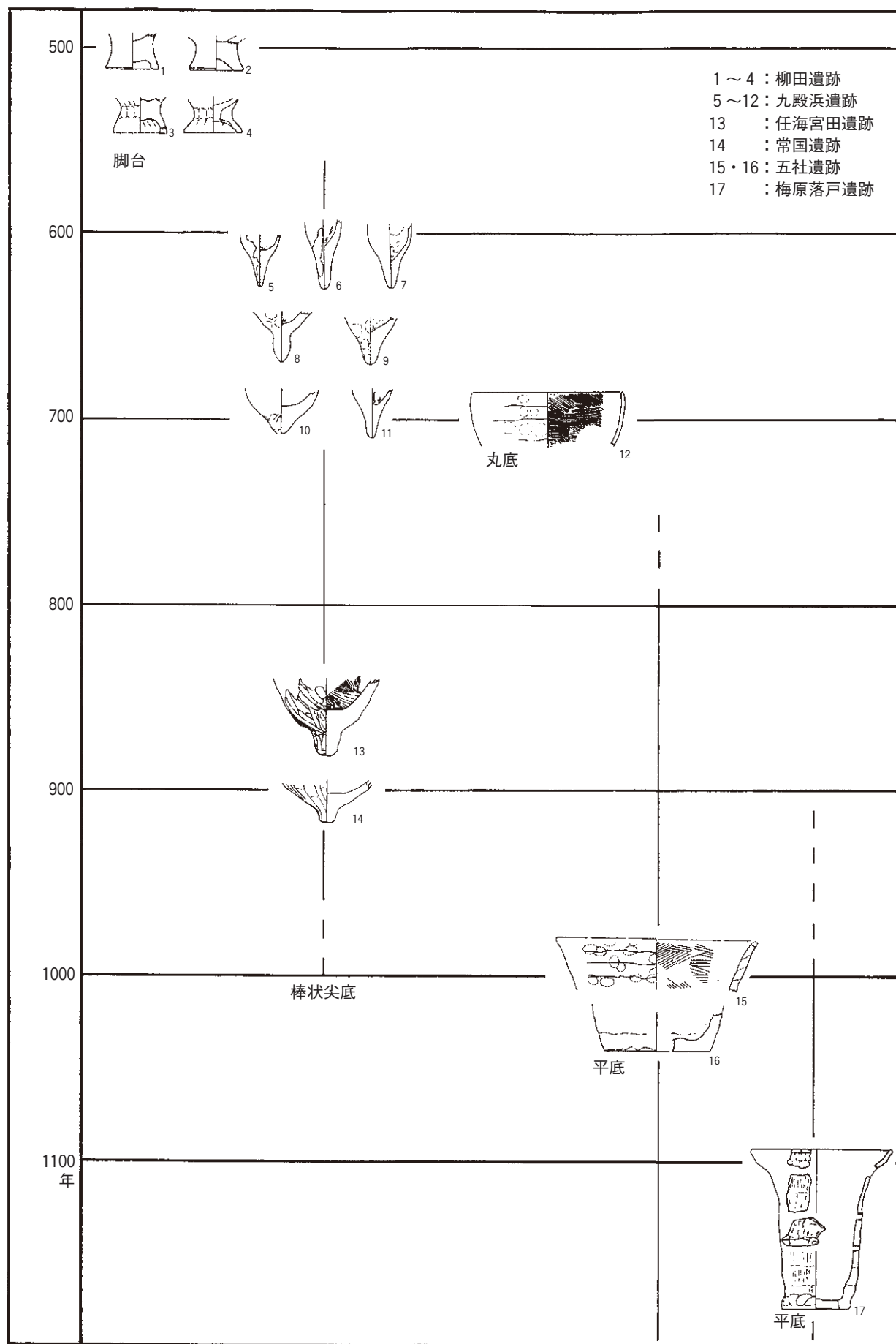
# 富山県の製塩土器出土遺跡

	遺跡名	所在地	水系	河川	標高 (m)	海岸からの 距離 (km)	時期	製塩土器分類	遺構その他
1	九殿浜遺跡	氷見市	臨海平野	—	4	0.1	6C 末～7C、7C 末～	棒状尖底／丸底	焼土遺構（炉？）
2	大境洞窟住居跡	氷見市	臨海平野	—	5	0.0	8C 初C、（9～10C）	棒状尖底／平底	
3	宇波西遺跡	氷見市	宇波川	宇波川	16	1.5	7C 後半～8C 前半	棒状尖底	
4	小杉谷内遺跡	氷見市	臨海平野	—	3	0.1	6C 前半	脚台	
5	藪田遺跡	氷見市	臨海平野	—	6	0.4	6C 前半／6C 末～7C	脚台／棒状尖底	
6	阿尾島尾 A 遺跡	氷見市	臨海平野	—	5	0.3	7C 後半	棒状尖底	
7	阿尾島田 A 遺跡	氷見市	臨海平野	—	4	0.5	7C 後半	棒状尖底	
8	稲積天坂遺跡	氷見市	余川川	余川川	7	1.5	7C	棒状尖底	
9	朝日貝塚	氷見市	臨海平野	—	5	0.5	6C 前半	脚台	
10	上久津呂中屋遺跡	氷見市	布勢水海	—	5	5.5	古代		
11	栗原 A 遺跡	氷見市	布勢水海	—	10	5.5	8C 後半～9C 前半	棒状尖底	
12	惣領浦之前遺跡	氷見市	布勢水海	—	10	7.0	古代		
13	柳田遺跡	氷見市	臨海平野	—	5	1.0	5C 末～6C 前半	脚台	
14	山岸遺跡	高岡市	臨海平野	—	10	0.6	7C 初	棒状尖底	
15	越中国府間連遺跡	高岡市	臨海台地	—	15	1.0	8C 末～	平底	
16	岩坪岡田島遺跡	高岡市	小矢部川	小矢部川	10	9.0	7C／9～10C	棒状尖底／平底	
17	石名田木舟遺跡	高岡市	小矢部川	岸渡川	22	18.0	7C 第3 四半期	棒状尖底	
18	五社遺跡	小矢部市	小矢部川	岸渡川	23	19.5	10C 後半～11C	平底	
19	桜町遺跡	小矢部市	小矢部川	子撫川	25	21.0	7C／平安	棒状尖底／平底	
20	小白山麓遺跡	小矢部市	小矢部川	渋江川	70	29.0	8C 後半	平底	
21	院林遺跡	南砺市	小矢部川	旅川	57	25.0	7C 前～中	棒状尖底	
22	在房遺跡	南砺市	小矢部川	山田川	67	27.0	7C 前半	棒状尖底	
23	梅原落戸遺跡	南砺市	小矢部川	梅現堂川	70	34.0	9C 前半／12C 後半	棒状尖底（短脚大型）／平底	集石遺構（焼土）
24	蛇喰正覚寺遺跡	南砺市	小矢部川	赤祖父川	128	21.0		棒状尖底	
25	下佐野遺跡	高岡市	小矢部川	千保川	11	10.0	平安	平底か	
26	八塚 C 遺跡	射水市	庄川	和田川	7	7.0		平底か	
27	常国遺跡	高岡市	庄川	和田川	20	12.0	9C～10C 初	棒状尖底（短脚大型）	土坑出土
28	北高木遺跡	射水市	庄川	神楽川	3	5.0	8C 後半～9C 前半	棒状尖底（短脚大型）・平底	
29	中曽根遺跡	高岡市	放生津湯	—	2	2.0		棒状尖底	
30	小杉流通業務団地No.6 遺跡	射水市	放生津湯	下条川	20	9.5	6C 末～7C 初	棒状尖底	
31	小杉流通業務団地No.7 遺跡	射水市	放生津湯	下条川	22	9.5	6C 末～7C 初	棒状尖底	
32	小杉丸山遺跡	射水市	放生津湯	下条川	25	10.5	7C 中	棒状尖底	
33	南太閤山 I 遺跡	射水市	放生津湯	下条川	30	10.0	6C 後半～7C 前半	棒状尖底	
34	上野南 I 遺跡	射水市	放生津湯	下条川	25	10.5	7C 第1 四半期	棒状尖底	
35	米田大覚遺跡	富山市	神通川	神通川	7.5	3.0	9C	棒状尖底（短脚大型）	
36	金屋南遺跡	富山市	神通川	井田川	11	8.0	9C 後半～10C 前半	平底	
37	砂子田 I 遺跡	富山市	神通川	坪野川	15	11.5	7C 末	棒状尖底	
38	中名 I・V 遺跡	富山市	神通川	坪野川	21	13.0	7C	棒状尖底	
39	中名 II 遺跡	富山市	神通川	坪野川	23.5	13.0	平安	平底	
40	轟坂 I 遺跡	富山市	神通川	神通川	10	9.5	9C 第4 四半期	平底	生産土坑
41	友杉遺跡	富山市	神通川	荒川	26	13.0	9C 後半～10C 初め	棒状尖底（短脚大型）	
42	任海宮田遺跡	富山市	神通川	荒川	30	13.5	9C～10C 前半	棒状尖底（短脚大型）／平底	
43	吉倉 B 遺跡	富山市	神通川	荒川	35	14.5	平安	棒状尖底（短脚大型）	
44	栗山椿原遺跡	富山市	神通川	荒川	36	14.5	10C 前半	棒状尖底（短脚大型）	
45	上新保遺跡	富山市	神通川	いたち川	36	12.0	平安		
46	利田横枕遺跡	立山町	白岩川	八幡川	25	8.0	6C 後半～7C 前半	棒状尖底	
47	古海老江遺跡	舟橋村	白岩川	細川	18	7.5	古墳末？		
48	辻坂の上遺跡	立山町	白岩川	板津川	31	8.5	7C	棒状尖底	
49	東江上遺跡	上市町	上市川	上市川	16	5.0	7C 末	棒状尖底	竪穴住居内と周辺
50	仏田遺跡	魚津市	臨海平野	—	17	1.0	平安		
51	じょうべのま遺跡	入善町	臨海平野	—	1	0.0	7C／平安前期	棒状尖底／平底	川跡出土
52	道下遺跡	朝日町	木流川	木流川	24	1.5	10C 後半	平底	
53	宮崎塚田遺跡	朝日町	臨海平野	—	6	0.5	中世		
54	宮崎・境遺跡	朝日町	臨海平野	—	6	0.2	中世？	脚	
55	境堂田遺跡	朝日町	臨海平野	—	6	0.2	12C	平底	
56	境開跡遺跡	朝日町	臨海平野	—	6.5	0.2	中世	平底・支脚	製塩炉
57	馬場山 D 遺跡	朝日町	臨海台地	—	20	0.5	10C	平底・円筒型土製品	石組（焼土）
58	境 A 遺跡	朝日町	臨海台地	—	10	0.5	平安	平底	焼土
59	境金剛遺跡	朝日町	臨海台地	—	30	0.3	平安？	平底	

遺跡分布図







富山県の製塩土器編年案（1／6）



# 新潟県における製塩関連遺跡

尾崎 高宏（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）

新潟県は、越後地域と離島である佐渡島および粟島を合わせると約630kmにわたる非常に長い海岸線を有する。県内ではこれまで112か所の製塩関連遺跡が知られており、うち71か所は佐渡島の海岸部もしくは海岸段丘周辺に集中的に分布し、一大生産地の様相を呈する。しかし、佐渡の製塩関連遺跡については、発掘調査事例が少なく、現状では実態が明らかとなっていない。一方、越後地域については、海岸砂丘及び内陸砂丘の周辺のほか、海岸部からは遠く離れた内陸部の河川に面した微高地等でも製塩関連遺物が出土する遺跡が分布することが近年明らかとなり、内水面交通による物資の流通や水産加工等への塩の使用に関する新たな知見が得られた。

時期については、古代（8世紀～10世紀）が主体となる。以下、時期ごとの変遷について概観する。

## 製塩土器の変遷と時期ごとの特色

- ①古代以前：古代以前の製塩関連資料は近年まで確認されていなかったが、胎内市天野遺跡（古墳前期と中期の集落遺跡）で県内初となる古墳時代中期の製塩土器が出土した。報告書によれば胎土分析の結果から、能登・七尾市周辺遺跡（三室オオタン遺跡）との類似性が指摘されている。
- ②古代ⅰ期（8C前半）：柏崎市刈羽大平遺跡など越後地域の海岸部において製塩が開始される。ⅱ期も含め、土器製塩の初期段階においては能登地域の製塩土器との器形の類似性が認められる。
- ③古代ⅱ期（8世紀後半～9世紀初）：大型平底・丸底のほか、口縁部屈曲のものなど、器形が多様化、混在する。なお、E類とした小型で口縁屈曲の「出山遺跡タイプ」については、共伴する土器から当該期に位置づけているが、富山県梅原落戸遺跡（12世紀）との器形の類似性から年代が大幅に下がるという見解もあり、煎熬具か焼塩具かの機能的側面も含め、類例の増加を待って検討の必要がある。
- ④古代ⅲ期（9世紀前半）：大型平底（A類）・中型（C類）・器台（円筒器台）のセットが確立し、これ以降、このセットについては土器製塩の終焉まで継続する。
- ⑤古代ⅳ期（9世紀後半）：A類では器形・容量の大型化傾向が見られる。また、県西部の高田平野周辺（越後国府周辺）において、内陸部の官衙関連遺跡など有力遺跡（消費遺跡）で棒状尖底土器が出土する事例が見られるようになる。生産地域（糸魚川地域）からの物資の流通・集積を示す。
- ⑥古代ⅴ期（10世紀）：A類は器形の外反傾向が強まり、大型化するとともに、底部の接合方法が変化（円板外周に粘土紐巻き上げ→円板上部に巻き上げ）する。村上市沢田遺跡では内水面に面する微高地で製塩炉が検出され、製塩土器とともに魚骨が出土し、水産加工場的な性格が推定されている。同市西部遺跡は、鍛冶・漆・製塩などの手工業生産が大型の掘立柱建物内に集約して確認された。
- ⑦ⅳ期以降（11世紀以降）：土器煮炊具の終焉とともに製塩土器も確認できなくなり、鉄釜へ移行したものと考えられる。

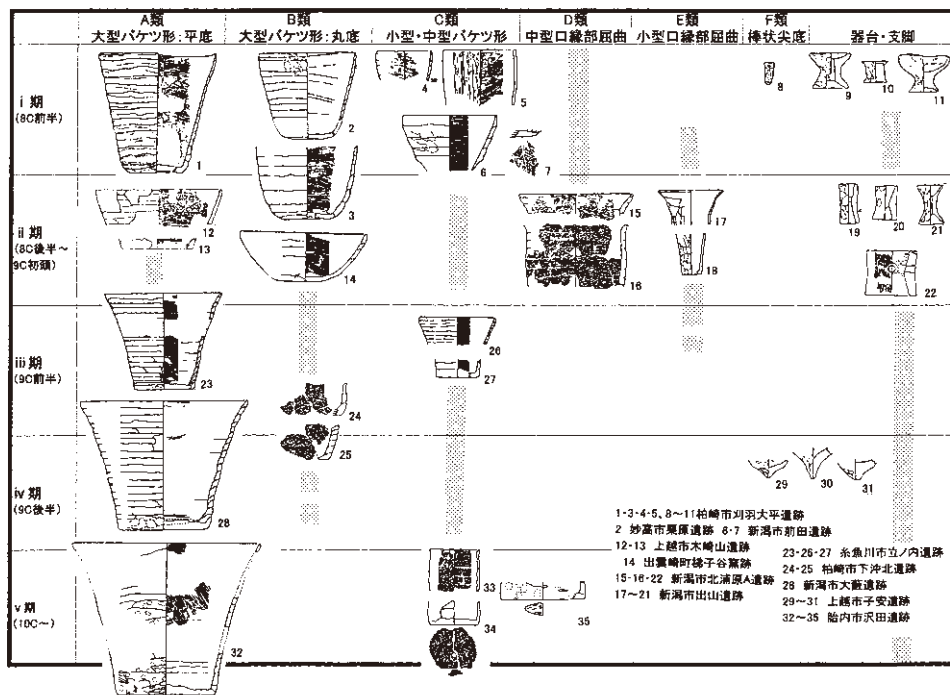
## 討議・資料見学会から

天野遺跡出土土器について：器形のみで比較した場合、「大阪湾Ⅰ式（庄内併行）」との類似性も否定できないのではないかとのご指摘をいただいた。能登地域の当該期資料（祖浜遺跡出土土器）との比較では、脚台部のつくりが明らかに祖浜例とは大きく異なっており、後出する国分高井遺跡出土例に近い印象がある。今後、出土事例の増加を待って比較検討したいと考えている。

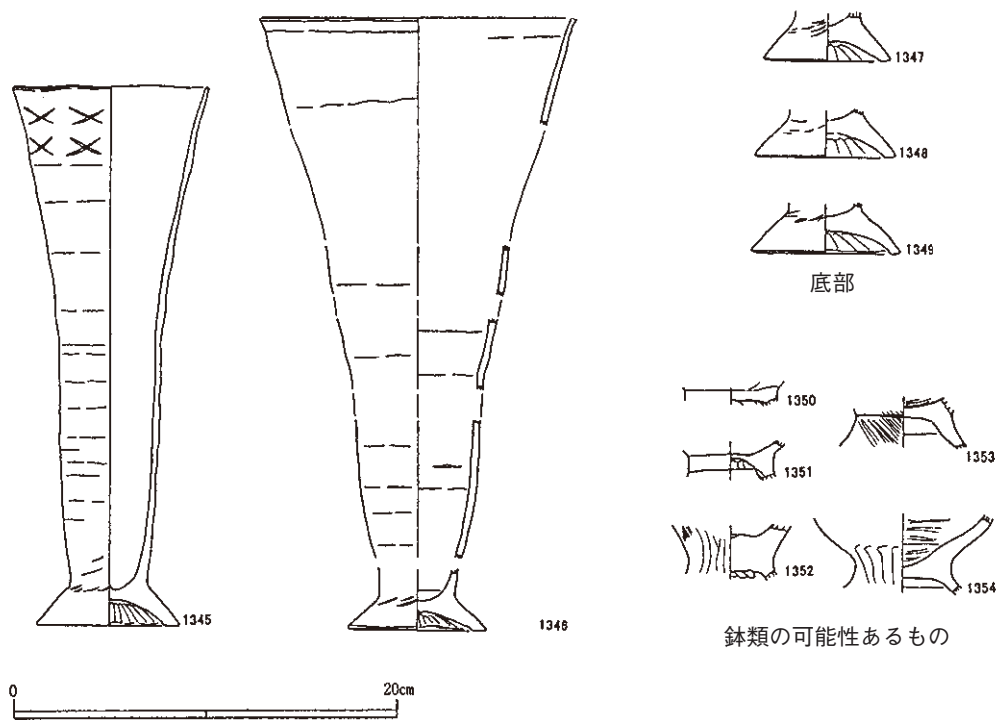


1 茂崎島遺跡	粟島浦村	29 塩ヶ崎遺跡	佐渡市	57 深浦遺跡	佐渡市	85 小丸山遺跡	新潟市
2 大津浜遺跡	佐渡市	30 鬼が岩遺跡	佐渡市	58 萩ノ浦遺跡	佐渡市	86 的場遺跡	新潟市
3 弾崎製塩遺跡	佐渡市	31 目観音堂遺跡	佐渡市	59 への割遺跡	佐渡市	87 六地山遺跡	新潟市
4 二ツ亀遺跡	佐渡市	32 浜戸遺跡	佐渡市	60 新谷竹ノ腰遺跡	佐渡市	88 北浦原 A 遺跡	新潟市
5 藻浦製塩遺跡	佐渡市	33 杉島岩陰遺跡	佐渡市	61 カコイ場遺跡	佐渡市	89 大藪遺跡	新潟市
6 菖蒲平浜遺跡	佐渡市	34 紋兵衛遺跡	佐渡市	62 小谷洞穴遺跡	佐渡市	90 前田遺跡	新潟市
7 大野製塩遺跡	佐渡市	35 差輪遺跡	佐渡市	63 かゝが井戸遺跡	佐渡市	91 下稲場遺跡	新潟市
8 願製塩遺跡	佐渡市	36 石ヶ原洞穴	佐渡市	64 西平遺跡	佐渡市	92 梯子谷窯跡	出雲崎町
9 北鶴島製塩遺跡	佐渡市	37 砂原 A 遺跡	佐渡市	65 柳沢遺跡	佐渡市	93 寺前遺跡	出雲崎町
10 岩屋山第 2 洞穴	佐渡市	38 新田 A 遺跡	佐渡市	66 瀧屋遺跡	佐渡市	94 刈羽大平遺跡	柏崎市
11 関公民館前遺跡	佐渡市	39 砂原神明社遺跡	佐渡市	67 青木遺跡	佐渡市	95 戸口遺跡	柏崎市
12 釜の元遺跡	佐渡市	40 宮の川遺跡	佐渡市	68 出口遺跡	佐渡市	96 京田遺跡	柏崎市
13 小田浜田遺跡	佐渡市	41 二見元村遺跡	佐渡市	69 水ナシ遺跡	佐渡市	97 下沖北遺跡	柏崎市
14 小田南遺跡	佐渡市	42 月見不池遺跡	佐渡市	70 和本遺跡	佐渡市	98 グルマ岩遺跡	柏崎市
15 小僧の川遺跡	佐渡市	43 送り坂遺跡	佐渡市	71 春日町遺跡	佐渡市	99 五反田遺跡	柏崎市
16 アンジャの浜遺跡	佐渡市	44 送り崎遺跡	佐渡市	72 西部遺跡	村上市	100 木崎山遺跡	上越市
17 北河内熊野神社遺跡	佐渡市	45 台ヶ鼻東遺跡	佐渡市	73 沢田遺跡	胎内市	101 今池遺跡	上越市
18 藻浦岬遺跡	佐渡市	46 台ヶ鼻遺跡	佐渡市	74 天野遺跡	胎内市	102 子安遺跡	上越市
19 南片中ノ川遺跡	佐渡市	47 塩ッ田遺跡	佐渡市	75 下原遺跡	胎内市	103 一之口遺跡(西地区)	上越市
20 井戸島の根遺跡	佐渡市	48 城ヶ鼻遺跡	佐渡市	76 村松浜遺跡	胎内市	104 東カナクソ谷遺跡	上越市
21 達者向遺跡	佐渡市	49 弁天岩遺跡	佐渡市	77 出山遺跡	新潟市	105 龍峰遺跡	上越市
22 達者中村遺跡	佐渡市	50 番場遺跡	佐渡市	78 東港太郎代遺跡	新潟市	106 栗原遺跡	妙高市
23 釜屋遺跡	佐渡市	51 滝脇遺跡	佐渡市	79 サン化学前遺跡	新潟市	107 宮ノ本遺跡	妙高市
24 下相川吹上遺跡	佐渡市	52 背ノ沢古墳	佐渡市	80 東港亀塚遺跡	新潟市	108 角地田遺跡	糸魚川市
25 どのの洞遺跡	佐渡市	53 背ノ沢遺跡	佐渡市	81 神谷内遺跡	新潟市	109 立ノ内遺跡	糸魚川市
26 かまんど遺跡	佐渡市	54 大立遺跡	佐渡市	82 向山遺跡	新潟市	110 道者ハバ遺跡	糸魚川市
27 大漁遺跡	佐渡市	55 亀脇遺跡	佐渡市	83 横山遺跡	新潟市	111 山岸遺跡	糸魚川市
28 助岩岩陰遺跡	佐渡市	56 大鼻崎遺跡	佐渡市	84 阿賀野川河口遺跡	新潟市	112 田伏山崎遺跡	糸魚川市

第 1 図 新潟県内の製塩関連遺跡



第2図 古代製塩土器の変遷



第3図 胎内市天野遺跡出土製塩土器

## 東北地方の土器製塩

柴田陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター）

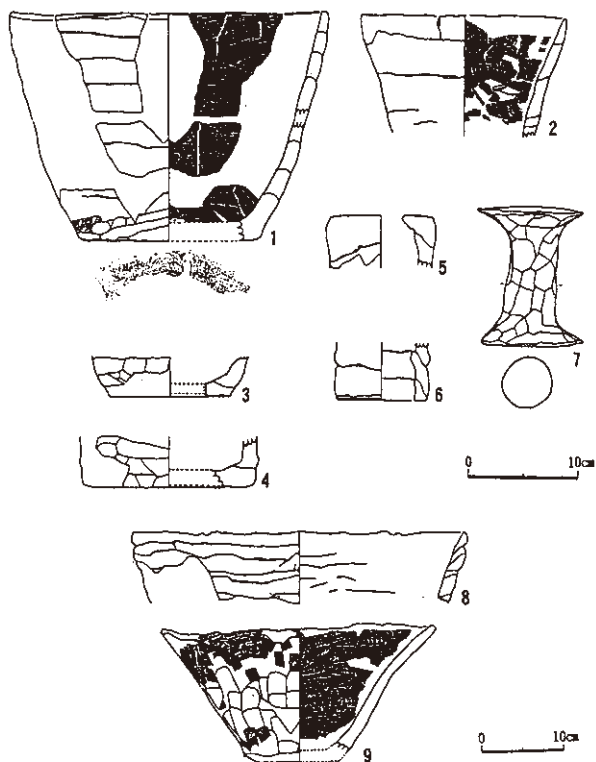
東北地方の土器製塩は縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代に行われていたことが判明している。遺跡は縄文時代では太平洋沿岸域を中心とした福島県、宮城県、岩手県と青森県の日本海・陸奥湾沿岸域に分布し、確実な年代は晩期前半の大洞 B-C 式～後半の大洞 A 式までである。弥生時代では数が極めて少なく、判然としているのは太平洋沿岸域の宮城県で 7 箇所である。奈良時代でも同様で日秋田県と宮城県で 2 箇所のみである。平安時代では東北各県で確認されている。本稿では紙幅の関係で、奈良・平安時代についてのみ概観する。

東北地方の奈良・平安時代の製塩土器は平底で、石川県能登地方、新潟県と同県の佐渡地方や山形県の日本海側や青森県の日本海側～陸奥湾沿岸、太平洋沿岸、それに太平洋沿岸側の岩手県、松島湾沿岸や福島県の沿岸部や内陸部でも出土し、東北に広く分布している事が判明している。製塩土器に伴い土製支脚が出土する遺跡もある。これら遺跡の年代は 8 世紀後半～10 世紀で考えられている。その系譜は若狭湾沿岸で 7 世紀に作られるようになった船岡式製塩土器にあると考えられている。

奈良時代の遺跡は秋田県のカウヤ（「コウヤ」と発音する）遺跡と宮城県の新浜 B 遺跡である。カウヤ遺跡では竪穴住居跡、焼土遺構などが検出され、竪穴住居跡から須恵器杯、北陸型の長胴甕と共に厚手の平底製塩土器、円筒形土製支脚が出土している。新浜 B 遺跡では 2 基の炉跡から薄手の平底製塩土器が出土している。器形は盥（タライ）のように浅く、やや厚い底部から胴部がやや外反し、薄い胴部から口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる特徴のある土器（図 7 - 1～10）である。

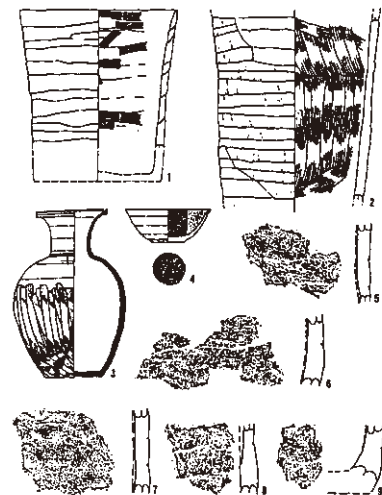
平安時代では律令制の浸透と共に製塩遺跡数が飛躍的に増加する。先述のカウヤ遺跡で焼土遺構（SN06）から口径 40cm のバケツ形の平底製塩土器や播鉢形の土器が出土している（図 1 - 8・9）。さらに作業場と考えられる遺構（SX11）からは須恵器杯、土師器杯、北陸型の長胴甕と共に、底部外面に木目状の圧痕が残る平底製塩土器や棒状土製支脚、円筒形土製支脚が出土している（図 1 - 2～7）。ここでは形態の異なる支脚の共伴が特筆される。遺構は他に「コ」の字状の石組炉があり、焚口部に円筒形土製支脚が埋設される（図 3 - 3、図 4）。埋土から平底製塩土器等が出土している（図 3 - 1・2）。秋田県の立沢遺跡では焼土遺構や土坑から平底製塩土器や円筒形土製支脚が出土している（図 5）。円筒形土製支脚には胴部中央に円孔が穿たれており、新潟県の下沖北遺跡、宮城県の江ノ浜貝塚（図 7 - 35・36）で類例のある稀な例である。秋田県の頭名地遺跡では土製支脚下端部に「U」字状の切り込みが入る例もある。青森県では 42 箇所の遺跡が確認されており、製塩遺跡（図 6）と消費地である集落遺跡（図 2）から、白砂式と呼ばれるバケツ型の製塩土器が出土している。製塩遺跡では製塩土器と土製支脚との共伴例が多く、支脚の形態は棒状や土管状で地域的なバラエティがあるようである。製塩土器の底部には、秋田県でもあるが、板目状圧痕が見られる例もある。青森県は律令制の及ばない地域であったが、この時期には擦文文化が定着しており、遺跡の調査例から、陸奥湾沿岸の土器製塩集団と擦文文化を担った人達との交流のあったことが判明している。宮城県では松島湾沿岸で平安時代だけで 114 の製塩遺跡が確認されている。製塩土器は新浜 B 遺跡の 2 号住居跡や、江ノ浜貝塚、館ヶ崎など多くの遺跡の出土例がある。厚手・大形と薄手・小形の 2 種類が在り、いずれも平底で胴部から口縁部の立ち上がりがほぼ直角で、両者の使い分けが想定されている。土製支脚は先述の江ノ浜貝塚の円筒形土製支脚の他に棒状土製支脚も出土している（図 7 - 11～34）。近年、能登の真脇製塩遺跡では平底土器と支脚だけがセットで確認されていることもあり、今後は東北と北陸の遺跡の細かい比較・検討が必要である。（図の出典『日本土器製塩研究』青木書店）





1 - 焼土遺構 (第1次調査) 2 ~ 7 - その他の遺構 (SX11)  
8・9 - 焼土遺構 (SN06) より出土

図1 秋田県カウヤ遺跡遺構内出土遺物



1 - 根城三丁目 2 ~ 4 - 表館(1)遺跡C住居跡煙出孔・床面出土 5 ~ 9 - 90朝日山遺跡61号土坑出土

図2 青森県集落内出土製塩土器・伴出土器  
[1 ~ 4 = 約 1/12 5 ~ 9 = 約 1/6]

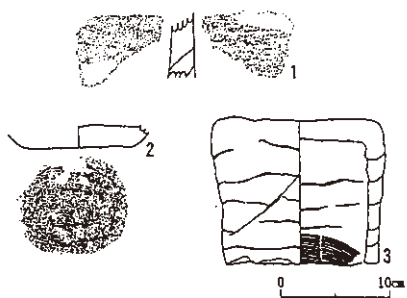


図3 秋田県カウヤ遺跡炉(SQ04)出土遺物

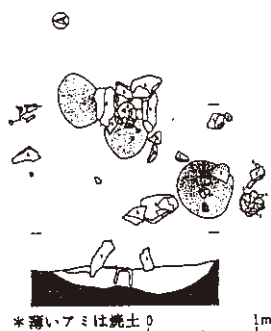
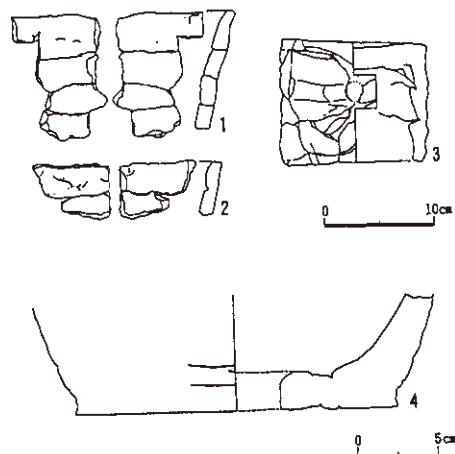


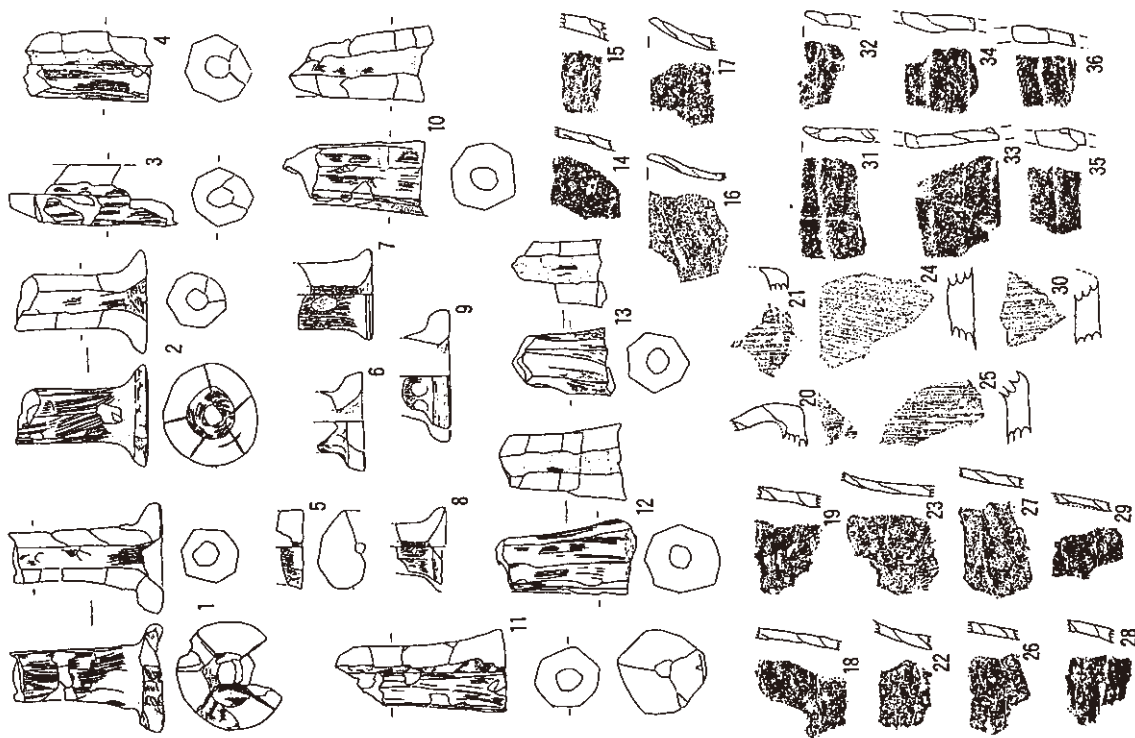
図4 秋田県カウヤ遺跡炉(SQ04)



1・2・4 - 焼土遺構より出土  
3 - 第5土坑底面より出土

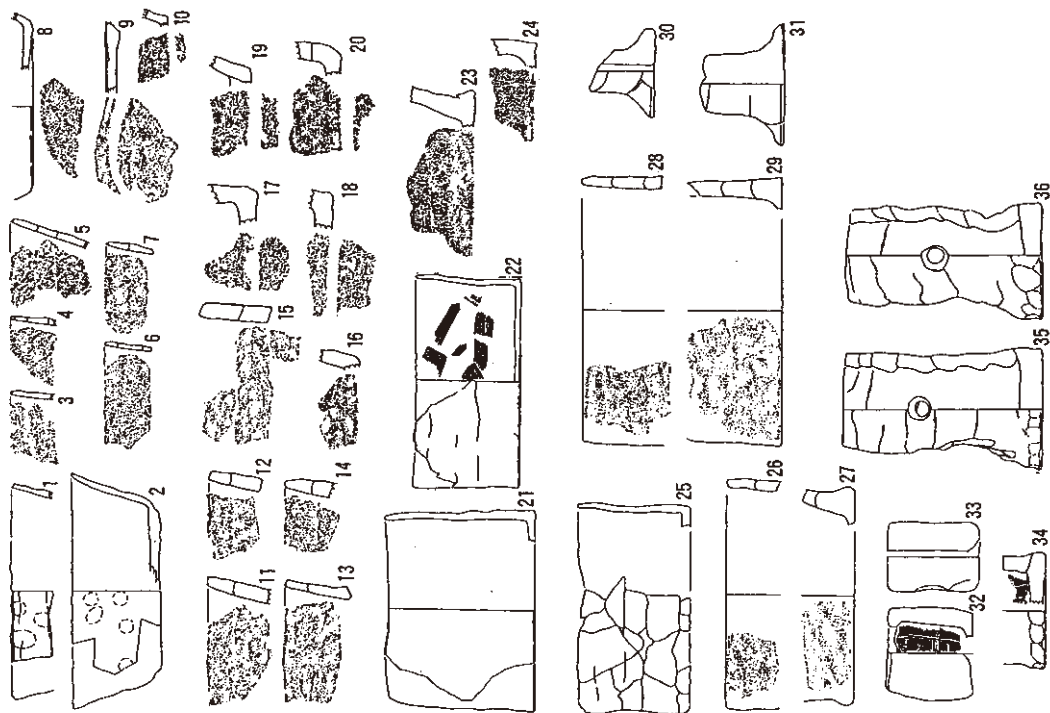
図5 秋田県立沢遺跡出土遺物





1～13-土製支脚 14～36-白砂式土器 1～30-瓦高(5)遺跡出土  
31～36-上尾飯(2)遺跡 6H出土

図6 青森県内出土白砂式製塩土器・土製支脚〔約1/6〕



1～10(奈良時代)新浜B 11～20(平安時代)新浜B 21～24・35・36(平安)江ノ浜貝塚  
25～31(平安)永浜 32～34(平安)館ヶ崎

図7 宮城県古代の製塩土器・支脚〔約1/6〕

# 討論と展望

荒木麻理子（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

地域別発表の後、討論を行った。討論にあたって、各地の事例報告の中で提示された、製塩土器の形態および機能と製塩炉の構造の関係性、製塩技術の系譜や形態変化の要因、あるいは地域間での比較など、いくつかの疑問点が整理され、討論のテーマとされた。

製塩土器の形態については、製塩実験により弱火あるいは炭火による長時間煎熬で作られた塩が煤や灰や不純物の入らない状態が良いものになること、加熱時に沸騰させず弱火を保てば煎熬中に土器が割れにくいということが知られており、より火の制御のしやすい自立可能な形態の脚台付製塩土器や棒状尖底製塩土器が発展したのではないかとの見解が示された。しかしながら、製塩土器の一律な形態変化は一律なものではなく、5世紀後半以降能登や九州、知多半島などで見られる脚台の長脚化や棒状脚の登場、備讃瀬戸や大阪湾岸で見られる丸底化、8世紀より各地で見られる製塩土器の大型化や煎熬用と焼塩用への機能分化の動きなど、各地域ごとの独自性が見られ、単純な機能論だけでそれらの動きを捉えることはできない。また、7世紀末から8世紀にかけて若狭において成立した大型平底製塩土器と大型石敷炉を使用する新たな土器製塩は、日本海伝いに東方へ伝播するが、大型石敷炉は伝わらず、土器のみが伝わるということが知られており、炉をはじめとする製塩遺構の構造の選択にあたってその要因となるものには土器の機能・形態以外に何があるのか、製塩遺構が構築される地面の状態も関係するのかなどの検討課題も提示された。討論の最後には、各地の塩生産の背景にある政治および流通・交易の状況や製塩土器や製塩遺構などの分析を通じて製塩技術の伝播や系譜、生産体制について検討を進めていく方向が示され、展望とされた。

翌24日には、当センター研修室で資料検討会を行った。珠洲市真脇製塩遺跡、珠洲市鵜島遺跡、珠洲市大谷中学校東遺跡、七尾市庵遺跡、七尾市三引遺跡、七尾市小島西遺跡、志賀町米浜遺跡などの製塩土器、土製支脚などを見学した。製塩土器では、脚台付製塩土器や棒状脚製塩土器について成形や調整について時代や地域を追って観察した。また、平底製塩土器については底部の成形技法および内外面の輪積み痕や底部の板目圧痕などの調整に注意して他地域との比較検討を行うなどした。支脚では特に富山県や東北地方にも見られる円孔あるいはV字状の切込みをもつ円筒形の支脚に注目して、円孔や切込の入れ方や成形・調整法などについて、それぞれ比較検討を行った。



討論の様子



資料見学会の様子